

性のうち個々のものに相当すると思われる語句が見られることが指摘されているが、それらは三性を三者の総合的な関係として捉えたものではないと言¹⁹⁴⁾。三性が具体的かつ体系的にまとまって説かれるのは瑜伽行派の経論で、『解深密經』や『瑜伽師地論』あたりからようである。ここでは以下の九経論、『瑜伽師地論本地分菩薩地』(BBh)、『解深密經』(SNS)、『瑜伽師地論聲聞地』(Vmsg)、『大乘莊嚴經論』(MSA)、『中辺分別論』(MAV)、『廣大乘論』(MS)、『唯識三十頌』(Trims)、『三性論偈』(Tris)および『入楞伽經』(LAS)にみられる三性説をまとめ、それらをAsの記述と比較してみたい。これらの諸経論の成立順は未だ確定されたものではないが、ここでは仮に、LASを除いて、先行研究を踏まえながら三性説の思想的な発展を考慮して並べてみた。

『瑜伽師地論本地分菩薩地』(BBh)¹⁹⁵⁾では、具体的に三性を指す用語は見られないが、三性それぞれに相当すると思われる概念が説かれている。

遍計所執性に相当する概念は、「ことばによる設定 (prajñapti)」など¹⁹⁶⁾と、言語とのかかわりが深いものと捉えられている。依他起性に相当する概念は、「ことばによる設定の[依り所となる]事物」¹⁹⁷⁾、「余るもの」など¹⁹⁸⁾とされる。そして、遍計所執性に対応する「ことばによる設定や言語を自体とする事物 (法)」は「存在しない」¹⁹⁹⁾、依他起性に対応するとした「余るもの」は「存在する」²⁰⁰⁾と説かれている²⁰¹⁾。そして円成実性に相当する概念は、「真如 (tathatā: p.48.4-5)」とか「言語表現されることを離れた本体を持つもの (nirabhilāpya-svabhāvatā: p.48.5)」²⁰²⁾という語として見られる。

ただ、「色形など」と名づけられる諸事物 (諸法) には、言語表現されることを離れた対象として存在しているものがあり、それこそが、最高の意味としては本性としての法性であると知られるべきである。」²⁰³⁾とあるように、「言語表現されることを離れた対象

¹⁹⁴⁾ 竹村牧男 (1995) pp.49.3-50.2.

¹⁹⁵⁾ 校訂サンスクリット、Wogihara, U. (1971); Dutt, N. (1966); 日本語訳: 相馬一孝 (1986)。その他『瑜伽師地論本地分』の菩薩地以外の章に関する、三性説と関連した研究として: Schmithausen, L. (2000)。

¹⁹⁶⁾ Wogihara, U. (1971) p.46.1. そのほか、「人という、ことばによる設定 (pudgala-prajñapti: ibid. p.46.3)」、「ことばによる設定や言語の通用 (prajñapti-vāḍopacārah: p.46.5)」、「ことばによる設定や言語を自体とする事物 (法) (prajñapti-vāḍātmako dharmah: p.47.21)」。

¹⁹⁷⁾ prajñaptier vastu: p.46.6-7.

¹⁹⁸⁾ avasīṣṭam: p.47.18. そのほか、「単なる事物 (vastu-mātram: pp.45.25, 46.4-46.5)」、「色形などの[身体]の構成要素 (rūpādayaḥ skandhāḥ: p.46.2-3)」、「ことばによる設定や言語の依り所 (prajñapti-vāḍāśrayaḥ: p.47.25)」。

¹⁹⁹⁾ nāsti: p.47.21.

²⁰⁰⁾ sat: p.47.18.

²⁰¹⁾ 「あるもの (A) があるところ (B) にない時、それ (B) はその (A) の点で空である、と正しく見る。そこにあるお余るもの (C)、存在しつつあるそれ (C) は今ある、とありのままに知る。これがありのままに、誤りなく空性へ入ることだと言われる。(p.47.16-20) は空性の定型句と言われ、それは中阿含の『小空經』に由来すると言う。星屋雅人 (1978) 「空性に放ける「余れるもの」」、pp.542-560; 向井亮 (1974) p.374.lower 6-11: 「『小空經』では、空性は、あくまでも空に住するための辦法 (空觀) の問題から捉えられ、煩悩の有と無を如実に知って得るという修證論的性格が強い」のに対し、『瑜伽論』(=BBh) の空性説は、ことばと実在という『般若經』と親しい問題が前面に出され、道理の上から存在論的に説かれている。そして、そこでは、空性の有的なあり方が特に強調されている。」

²⁰²⁾ そのほか、(attvām: p.46.1)、「如実な (yathā-bhūta: p.48.4)。

²⁰³⁾ yā ... rūpādi-samjñakānām dharmāṇām nirabhilāpyenārthena vidyamanatā saśā

として存在しているもの」がそのまま「本性としての法性」であるとされており、依他起性と円成実性の区別があいまいな箇所もあり、竹村牧男氏の述べるように²⁰⁴⁾、三性の概念が明瞭に区別されて確立しているとは言い難い。

ここに説かれているものをAsと比較するとき、両者は概念としては一致しているが、それ以外での共通点は少ない。まず用語の一致が見られない。つまりAsでは三性説と共通の用語として kalpita, paratantra が見られるのに対し、BBh にはそうしたものが無い。また説き方の違いもあり、As では一般的な存在論の立場から説かれるのに対し、BBh では prajñapti や nirabhilāpya が用いられるなど、言語との関わりが特に強調される。したがって、両者には直接的な影響関係はないのではないかと思われる。

『解深密經』(SNS)²⁰⁵⁾では三性を示す語が見られ、その三者の関係が明確に説かれ、三者ごとの説明も詳しくなされている。その三性は tri-svabhāva ではなく [tri]-lakṣaṇa (mtshan ſid [gsum po]: VI-3) とされている。また、三無自性性も説かれているが、そこでは [tri]-niḥsvabhāvatā (mtshan ſid no bo ſid med pa ſid [gsum po]: VII-3) で svabhāva という語が用いられている。

まず遍計所執性に関しては、「諸事物 (諸法) の本体あるいは違いとして名と言語契約によって設定されていること」など²⁰⁶⁾とされ、「対象に毛髮状の影が『実際に』あると誤って思うこと (趣意)」²⁰⁷⁾、「水晶がある色と重なった時、水晶をその色をした宝石だと誤って把握すること (趣意)」²⁰⁸⁾と喩えられる。次に依他起性に関しては、「諸事物 (諸法) が縁起すること」²⁰⁹⁾、依他起の特徴に対して遍計所執の特徴だと執着することに依って知られる」²¹⁰⁾とされ、それが「対象に毛髮状の影があること (趣意)」²¹¹⁾、「非常に透明な水晶 [そのもの]」²¹²⁾と喩えられる。「清浄な対象ではない」²¹³⁾とされていることにも注意が必要である。そして円成実性は、「諸事物がそのままにあること (諸法の真如)」²¹⁴⁾、依他起の特徴に対して遍計所執の特徴だと執着することがないことに依っ

paramārthataḥ svabhāva-dharmatā veditavyā: Wogihara, U. (1971) p.48.20-22.

²⁰⁴⁾ 竹村牧男 (1995) p.57.2-3: 「仮説された法と仮説の所依の区別は自覚したもの、仮説の所依と法性そのものの区別の自覚はさほど明確ではなく、したがって、三種の存在論的範疇を明瞭に主張するには至っていないのである。」

²⁰⁵⁾ 校訂データベースおよびフランス語訳: Lamotte, É. (1935); ドイツ語訳: Frauwallner, E. (1956) pp.284-295 (VI-1-12, VII-1-10, 24); 日本語訳: 梅谷泰昭 (1994)。またここに説かれる三性説は兵藤一夫 (1990) pp.26-33 によくまとめられている。また本稿では扱えなかった『般若經』の「勢勸請問章」と三性説との関連についてもまとめられている。

²⁰⁶⁾ chos nams kyī ſi bo ſid dan bye brag tu minī dan brdar nam par bḥag pa: VI-4. そのほか、(形相と結合した名に依って知られる (mtshan ma dan 'brel ba'i minī la brten ... rab tu ſes so: VI-10))

²⁰⁷⁾ rab rib kyī skyom: VI-7.

²⁰⁸⁾ log par 'dzin pa: VI-8, 9.

²⁰⁹⁾ chos nams kyī rten ciñ 'brel par 'byu ba ſid: VI-5.

²¹⁰⁾ gñan gyi dhan gi mtshan ſid la kun brtags pa'i mtshan ſid du mñon par ſen pa la brten ... rab tu ſes so: VI-10.

²¹¹⁾ rab rib kyī mtshan ma ... sñan bar gyur pa: VI-7.

²¹²⁾ ſel ſin tu gsal ba: VI-8, 9.

²¹³⁾ nam par dag pa'i dmigs pa ma y'u pa: VII-6.

²¹⁴⁾ chos nams kyī de bḥin ſid: VI-6.

て知られる」²¹⁴⁵)とされ、「毛髪状の影が消えた本来の対象の姿(眼における毛髪状の影という誤りの顕現を離れた)」²¹⁴⁶)、「ある色と重なった水晶に、その色をした宝石の特徴は常に永遠に成立せず本体のないものであること(趣意)」²¹⁴⁷)と喩えられる。また、清浄でないこととされた依他起性に對して、「法無我、真如、清浄な対象」²¹⁴⁸)とされる。

また三無自性性として、相無自性性が「名や言語契約として設定された特徴であるけれど固有の特徴によって存続してはいない」²¹⁴⁹)として、生無自性性が「他の縁の力によって生じているが自体によるものではない」²²⁰)として、勝義無自性性が「縁起する事物(法)であり、生無自性性によって本体のないもの」²²¹)および「あらゆる事物(一切法)の無自性性によって明らかにされる」²²²)として、説かれる。

これら三無自性性は上の三つの特徴(三相)と密接に関連していることが分かる。つまり三無自性性では三つの特徴(lakṣaṇa)がそれぞれの方に於いて本体(svabhāva)を持たないものであることが説かれている。tri-lakṣaṇaに代えて、以後の経論で三性をtri-svabhāvaと呼ぶようになるのはここを発端としているのかもしれない。

ここで説かれる三性の概念はAsのものと非常に近い。三性の用語が何らかの実体を表わすsvabhāvaではなくそのものの特質を示すlakṣaṇaで表わされていることから、いっそう両者の親近性が感じられる。Asではparatantraやkalpitaはbhāvaつまり外縁の対象あるいは現象世界の、その特徴を示す形容詞として使われていたにすぎず、その特徴自体に何らかの実体を見ようとするものではなかった。またSNSで依他起性は「清浄な対象ではない、円成実性が「清浄な対象である」と言われていることも、Asでparatantraが世俗的なものとされていることに近いと言えよう²²³。両者の違いは、SNSでは三性が体系的に確立されていてAsよりも三性それぞれの独立性と三性相互の関連性が明確になっている点である。その意味では、SNSの三性説はAsに説かれていることよりも発展したものと考えられる。

- 2145) gñan gyi dban gi mshan nīd la kun brtags pa'i mshan nīd du mion par zen pa med pa la brten ... rab tu ses so: VI-10.
 2146) mig la rab rib kyi skyon chags pa dai bral bar gyur pa: VI-7.
 2147) mshan nīd der rtog pa rtag pa'i dus dai ther zug ther zug gi dus su ma grub cin no bo nīd med pa nīd: VI-9.
 2148) chos bñag ma mchis pa, de bñan nīd, nam par dag pa'i dmigs pa: VII-25.
 2149) mñi dai brdar nam par bñag pa'i mshan nīd yin gyi ran gi mshan nīd kyes nam par gnas pa ni ma yin pa: VII-4.
 220) rkyen gñan gyi stobs kyes byun ba yin gyi bñag nīd kyes ni ma yin pa: VII-5.
 221) rten cin 'brel par 'byun ba'i chos gan dag skye ba no bo nīd med pa nīd kyes no bo nīd med pa de dag: VII-6.
 222) chos thams cad kyi no bo nīd med pa nīd kyes rab tu phyed ba yin pa: VII-6.
 223) 「清浄と雑染の問題で、VI-11, 12に見られる「特徴をもたない事物(mishan nīd med pa'i chos)」「雑染な特徴をもつ事物(kun nas ñon mñis mshan nīd chos)」「清浄な特徴をもつ事物(ñin tu nam dag mishan nīd chos)」に関しては、それら三者をそのまま三性に対応させることには問題があるように思われる。VI-11, 12にはその対応は明示されていない。兵藤一夫(1990) pp.30.30-31.9ではそれら三者はそれぞれ通計所縁性、依他起性、円成実性に開係づけられているが、特に通計所縁性と依他起性への開係についてはこれら VI-11, 12 だけでは判断しかねる。持念義昭(1994) pp.107-117でもこれら三者は三性に相当するものとしては解説されていない。あえて分類するとすれば、水晶の喩えなどはむしろ「特徴をもたない現象」が依他起性で「雑染な特徴をもつ現象」が通計所縁性にあたらないだろうか。

『瑜伽師地論探決沢分』(VinSg)²²⁴)ではSNSと違って、三者がtri-svabhāva(ño bo nīd gsum: P 'I1967)とされている。

通計所縁性は、「名と言語契約から生じる本体」²²⁵)、「名のみ」²²⁶)とされ、依他起性は、「縁起する本体」²²⁷)、「言語表現される有為の事物がすべて集められたもの」など²²⁸)とされ、円成実性は、「諸事物がそのままにあること(諸法の真如)」²²⁹)、「聖者の知識の対象」など²³⁰)とされ、また「実在の極限」²³¹)、「知られるべき法界」²³²)ともされる。

また、三無自性性が三性と同等なものとして説かれている。すなわち、相無自性性が「諸事物(諸法)の、言語習慣から生じるという本性」²³³)、生無自性性が「諸々の形成作用は縁起するものであるから縁の力によって生じるものの、自らは生じないこと」²³⁴)、勝義無自性性が「真実の意味として特徴を離れている事物(法)」²³⁵)とされる。こうした記述はSNSの三無自性性とほぼ一致する。

また五法と関連した記述も見られる(P 'I24a8-b2)。五法(chos lha po dag)は因相(rgyu mshan) ²³⁶)、名(min)、分別(nam par rtog pa)、正智(yan dag pa'i ses pa)が依他起性に、残りの一つ(gcig)、つまり真如が円成実性に配当され、通計所縁性に当たるものではないとされる。この分類はこの論書に特徴的なものといえる²³⁷。

三性における雑染と清浄の区別がはつきりと述べられている個所はないが、依他起性に関しては雑染の側面と同時に、清浄の側面を認める記述の現れる個所がある²³⁸。

VinSgにおける三性説はSNSのものと比較したとき、三性にsvabhāvaという語を用

- 224) チベット訳: P no.5539, Zii-1142b8; D no.4038, Śīl-Zī127a4 (本稿では以上2版を校合)。VinSgにおける三性説は、兵藤一夫(1991) pp.2-4によくまとめられている。
 225) mñi dai brda las byun ba'i no bo nīd: 'I196b8.
 226) mñi tsam: 'I27b4.
 227) rten cin 'brel par 'byun ba'i no bo nīd: 'I20a1.
 228) brjod par bya pa 'dus byas kyi chos po thams cad bñus pa: 'I27b8. そのほか、「言語表現される事物のすべて(brjod par bya ba'i dños po thams cad: 'I27b8)」。
 229) chos nam kyi de bñan nīd: 'I20a2.
 230) 'phags pa'i ye ses kyi yul: 'I20a2-3, D òm... そのほか、「聖者の知識の領域(phags pa'i ye ses kyi spyod yul: 'I20a2)」、「聖者の知識の縁り所(phags pa'i ye ses kyi dmigs pa: 'I20a3)」。
 231) yan dag pa'i mñi: 'I28b5.
 232) chos kyi dñyis ses par bya ba: 'I28b5-6.
 233) chos nam kyi tha sfad las byun ba'i no bo nīd: 'I18a2.
 234) 'du byed nam ni rten cin 'brel par 'byun ba yin pa'i phyir rkyen gyi stobs kyes ba yin gyi ran mi skye ba: 'I18a2.
 235) de kho na'i don gyis mshan nīd dai bral ba'i chos: 'I18a3.
 236) 横山敏一(1976)。これはmshan ma, rgyu mshan, rgyuとチベット訳されるnimitta一般に開いて考察した雑れたものである。その中では五法の「因相」に関する考察もあり、経論によってその価値が異なることが指摘されている: pp.94.1-98.17.
 237) VinSgでの五法に関する研究として次のものがある: 勝呂信静(1985).
 238) P 'I24b2-4 (D Zī22b3-5), P 'I25b6-8 (D Zī23b6-7); 兵藤一夫(1990) pp.3.27-4.16. この個所では「雑染となっている依他起性(kun nas ñon mñis par 'gyur ba'i gñan gyi dban gi no bo nīd: P24b3)」と「清浄となつていない[依他起性](nam par byan bar 'gyur ba: P24b3)」や、二種の依他起性として「通計所縁性に執着することによって得られるもの(kun brtags pa'i no bo nīd la mion par zen pas kun nas blañ(D blañ) ba: P25b7-8)」と「それ(通計所縁性)に執着することがないことにより得られるもの(de la mion par zen pa med pas kun nas blañ(D blañ) ba: P25b8)」が説かれている。

いていること、また五法と関連した記述が見られること、依他起性に雑染だけでなく清浄の側面をも認めていること、の三点が新たに加わっていると言える。一般に *VimŚg* は *SNS* を受けて著わされたものとされる²³⁹⁾が、この三性説に關しても同様のことが言える。*VimŚg* では上に挙げたような新たな点はあるけれど、基本的には *SNS* の三性説に忠実なものであるからである。

したがって、三性に關する基本的な概念としては *As* と依然、通底していると言える。『大乗莊嚴經論』(*MSA*)²⁴⁰⁾では、*SNS* と同様に三性は [tri]-lakṣaṇa (XI-38, 39, 40) とされているが、それは現象世界のあり方を形容詞的に表わす傾向のあった *SNS* とは違つて、*VimŚg* に見られるような何らかの形をもつた *svabhāva* に近いものと言われていると思われる。それは *VimŚg* のもほど明確に示されてはいないものの、概念としては *tri-svabhāva* に対応していると言える。三性説に關する部分に限って言えば、この *MSA* では、形式としては *SNS* を踏まえつつも内容は *VimŚg* でさらに進展したものを引き継いでいるのではないだろう。

遍計所執性に關しては、「言語に對應する対象が名によって切り出されたものの像」な²⁴¹⁾とされ、また「幻において作られたもの」²⁴²⁾、「その物(幻の像の实体)」²⁴³⁾と、喩えられる。依他起性については、「三種三種を顯現としてもつ、つまり「把握されるもの」「把握するもの」を特徴として持つ虚妄分別」²⁴⁴⁾とされ、「幻」²⁴⁵⁾とか「その形象(幻の像が知識の中に映し出されたもの)」²⁴⁶⁾と喩えられる。円成美性については、「無であり有であること」など²⁴⁷⁾や、「轉想作用のないこと」²⁴⁸⁾とされ、「そこにその物はな²⁴⁹⁾いこと(幻において幻の像の实体はないこと)」²⁴⁹⁾、「幻などにおいて存在非存在の區別がなされないこと」²⁵⁰⁾と喩えられる。

ここで特筆すべきことは依他起性が虚妄分別とされていることである。つまり、これまでは外界の対象そのものを指していた依他起性がここでは知識の中に取り込まれた対

239) その理由は *VimŚg* において *SNS* が引用されているからである。兵藤一夫 (1990) p.35 note 5; Schmithausen, L. (1987) pp.13-138, 14.11-14.13.

240) 校訂サンस्कクリットおよびフランス語訳: Lévi, S. (1907); Lévi, S. (1911); これらの正誤表: Nagao, G. M. (1958); 校訂サンस्कクリットおよび英語訳: Limaye, S. V. (1992); 第 11 章の校訂サンस्कクリット: 舟橋尚哉 (2000)。本稿では帰還部分のみを扱う。またここでの三性説は、兵藤一夫 (1991) pp.4-14 によくまとめられている。

241) *yathā-jalpārtha-samjāyā nimitam*: XI-38a. そのほか、「その(前述の像の) 影在印象 (*tasya vāsanā*: XI-38b)」、「それ(前述の像) からの対象の顯現 (*tasmād ... artha-vikhyānam*: XI-38c)」、「名に對應する対象の、対象に對應する名の [それぞれ] 顯現 (*yathā-nāmārtham arthasya nāmnaḥ prakhyānatā*: XI-39ab)」。

242) *māyā-krīam*: XI-15c.

243) *tad-bhāvah*: XI-19b.

244) *tri-vidha-tri-vidhābhāso grāhya-grāhaka-lakṣaṇo 'bhūta-parikalpaḥ*: XI-40abc.

245) *māyā*: XI-15a.

246) *tad-ākṛti*: XI-19a.

247) *abhāva-bhāvātā*: XI-41a. そのほか、「有と無が平等であること (*bhāvābhāva-samānatā*: XI-41b)」、「形跡でなく寂滅であること (*aśūnta-śūntā*: XI-41c)」。

248) *akalpā*: XI-41c.

249) *tasmān na tad-bhāvah*: XI-16ab.

250) *bhāvābhāvāviśeṣaś ca māyādisu vidhyāte*: XI-20cd.

象を指しているのである。それはすなわち三性すべてが知識の中に取り込まれることを意味する。これは三性説と唯識説の融合と言え、ここきて三性説は大きな転換点を迎えたと言える。

ここでの三性説の特徴は遍計所執性を対象の顯現と名の顯現、つまり所取と能取に分けていることと、依他起性をも三種と三種を持つもの、つまり所取と能取を持つものとしていてることである。これら両者の所取・能取は厳密には同じものではなく、前者はすでに把握された客体とすでに把握した主体、後者は把握されるべき客体と把握すべき主体である。いわば前者はすでに知識の中から切り出された顯現、後者は知識の中のこれから切り出される可能性を有した顯現である²⁵¹⁾。

ここではもはや三性説は *As* のものとは異なるものとなっている。

『中辺分別論』(*MAV*)²⁵²⁾では、三性に相當する語は「三種の本体」²⁵³⁾である。また I-5ab: *kalpitāḥ paratāntarāś ca paritṛipanna eva ca* / でのように、*svabhāva* なしで用いられている。

遍計所執性は、「二つ」²⁵⁴⁾、「対象」²⁵⁵⁾、「いかなるときにも存在しない」²⁵⁶⁾とされ、依他起性は、「虚妄分別」²⁵⁷⁾、「三界に属する「心」と「心に属するもの」」²⁵⁸⁾、「存在するが真実としてではない」²⁵⁹⁾とされ、円成美性は、「空性」²⁶⁰⁾、「二つのものの非存在」²⁶¹⁾、「真実として存在しかつ存在しない」²⁶²⁾とされる。

MAV は唯識思想を説くものであるが、中觀思想との関わりも深い。冒頭の I-1, 2 では空性が虚妄分別との関わりの中で説明され、I-12-22 ではさらに空性に關する記述が続く。III-10-12 では依他起性の位置付けが明確ではないけれど、三性と二諦との關係が説かれる。

そのほか III-13 では三性と五法との關係が述べられる。ここでは遍計所執性と依他起性に因相と分別と名が含まれ、円成美性に正智と真如が含まれることが説かれる。しかしその際、三性の名は具体的に挙げられておらず、三性が五法と關係することは、なんらかの經論を前提として述べられている観がある。こうした三性に關する暗黙の了解のようなものは、この論書の冒頭でいきなり「虚妄分別」という語が依他起性に代わって用いられていることから伺えよう。つまり、あえて經論名を挙げるならば、*VimŚg* に見られた三性と五法との關係、*MSA* に見られた依他起性が虚妄分別であることを *MAV*

251) 勝呂信静 (1982) pp.15-19. 同氏は前者を「實在論的な主観・客観」、後者を「観念論的な主観・客観」とする。(p.17 lower 17, 19.)

252) 校訂サンस्कクリット: Nagao, G. M. (1964); 日本語訳: 長尾雅人 (1967)。本稿では帰還部分のみを扱う。

253) *svabhāvas trividhah*: III-3.

254) *dvayam*: I-1b.

255) *arthah*: I-5c.

256) *asad nityam*: III-3ab.

257) *abhūta-parikalpāḥ*: I-1a, 5c.

258) *citta-caitāś tri-dhānukāḥ*: I-8b.

259) *sad apy atattvataḥ*: III-3b.

260) *śūnyatā*: I-1c.

261) *dvayābhāvah*: I-5d.

262) *sad-asat tattvataḥ*: III-3c.

は引き継いでいるのではないかと推測される²⁶³⁾。また、*MSA* で「三種三種の顕現」とされてきたものがここでは「心と心に属するもの」と、さらに明確にされている。

したがって、*MAV* と *As* との関係については、*MSA* の場合と同様に *MAV* でも三性が知識の中に取り込まれているという点では、両者の思想は同一とは言えない。ただし、*MAV* で三性が空性や二諦説といった中観思想との関わりで説かれていること、また三性の記述の直後に「増益」と「損減」の記述があることは *As* と類似している²⁶⁴⁾。

『毘大乗論』(*MS*)²⁶⁵⁾ では、三性は *[tri]-lakṣaṇa*²⁶⁶⁾ とも *[tri]-svabhāva*²⁶⁷⁾ とも呼ばれる。そして三性を挙げる際にまず依他起性を挙げるのがこの論書の特徴である。

遍計所執性に関しては、「[外界の] 対象は存在しないけれども知識に過ぎないそれが対象として顕現すること」²⁶⁸⁾、「それ(依他起性)を依り所としている非存在の対象が[まさに対象として] 顕現している」²⁶⁹⁾、「自己の特徴がないものに對して分別しているにすぎない」²⁷⁰⁾、「分別したものの、分別されたもの」²⁷¹⁾、「無限にある[対象の] 形を分別したもの」²⁷²⁾、「ある[対象の] 形が[実体をもつものとして] 分別されたところのもの」²⁷³⁾、「名によって対象[を分別すること]」など²⁷⁴⁾とされ、依他起性は、「アーヤ識の種子をもち虚妄分別に包摂されている知識」²⁷⁵⁾、「実在ではなく迷乱に過ぎないものが対象として顕現することの依り所」²⁷⁶⁾、「知識にすぎないもので対象が顕現する依り所」²⁷⁷⁾、「自らの潜在印象の種子から生じることから、それゆえ原因という他の

²⁶³⁾ 兵藤一夫 (1991) p.17 note 20. *MSA* と *MAV* の「先後は明確ではないが、三性説としては、後者の方が虚妄分別を中心によく組織化されている。」ただし *MSA* XVIII-43, 44 の注釈部分には *MAV* への言及がある: *yathākam Madhyāntavibhāṣe* / (Lévi, S. (1907) pp.140.26-141.1). *MSA* は論部分と注釈部分が同一人物によるものでない可能性があるため、このことによってたまたちに *MSA* の偽縁部分に対する *MAV* の先行性が証明されるわけではない。

²⁶⁴⁾ *MAV*: *svabhāvas tri-viśho 'sac ca niyaṇ saṁ cāpy atātavataḥ / sad-asat tattivatāś cēti svabhāva-traya-īpyate* // III-3

saṁārōpāpavācāya dharmā-puṭṭgalayor iha / grāhya-grāhakaṇyōś cāpi bhāvābhāve ca darsanam // III-4

As: *svabhāvaḥ prakṛtiś tatīvaṁ dravyaṁ vasiu sad ity api / nāsti vai kalpitō bhāvaḥ paratantres tu vidyate* // 45

astīti kalpitē bhāve samārōpas tveyōditaḥ / nāstīti kṛtakōchedād uchedaś ca prakāśitah // 46

²⁶⁵⁾ 校訂チャベット: Lamotte, É. (1938), 長尾雅人 (1982); 日本語訳: 長尾雅人 (1982).

²⁶⁶⁾ *mtshan nīd* [gsun po]: II-1.

²⁶⁷⁾ *no bo nīd* [gsun po]: II-15.

²⁶⁸⁾ *don med kyan man par rig pa tsam de don nīd du snai ba*: II-3.

²⁶⁹⁾ *de la gnas pa'i don med pa [don nīd du] snai ba*: II-15.

²⁷⁰⁾ *rai gi mtshan nīd med la kun tu rlog pa tsam*: II-15.

²⁷¹⁾ *kun tu rlog pa, kun tu brtags par bya ba*: II-16.

²⁷²⁾ *nam pa miha' yas pa'i nam par rlog pa dag*: II-16.

²⁷³⁾ *nam pa gān du ... kun tu brtags pa de*: II-16.

²⁷⁴⁾ *min gis dmigs pa*: II-16. そのほか、「本体として分別すること (no bo nīd du kun tu rlog pa: II-18)」、「純粋性として分別すること (khyad par du kun tu rlog pa: II-18)」、「分別されたという特徴をもつ (kun brtags pa'i mtshan nīd: II-32)」。

²⁷⁵⁾ *kun gāi nam par śes pa'i sa bon can yan dag pa ma yin pa kun rlog pas bsduṣ pa'i nam par rig pa*: II-2.

²⁷⁶⁾ *yod pa ma yin pa dai nor ba'i don snai ba'i gnas*: II-2.

²⁷⁷⁾ *nam par rig pa tsam don snai ba'i gnas*: II-15.

ものに依っている」²⁷⁸⁾、「生じた後には一瞬間より長くは自己がとどまることができない」²⁷⁹⁾、「意識」²⁸⁰⁾、「潜在印象の種子であるところの他のものに依っていること」²⁸¹⁾、「汚れと清らかさが本体として完全には成立せず、他に依っていること」²⁸²⁾、「依り所という特徴をもつ」²⁸³⁾とされ、円成美性は、「依他起性そのものにおいてその対象の特徴が完全に存在しないこと」²⁸⁴⁾、「それ(遍計所執性)が決して存在しないという特徴をもつ」²⁸⁵⁾、「他のものにならない」²⁸⁶⁾、「清浄な対象」²⁸⁷⁾、「あらゆる善の事物(法)のうちで最高のもの」²⁸⁸⁾、「本体として完全に成立している」²⁸⁹⁾、「清らかで完全に成立していること」²⁹⁰⁾、「法性という特徴をもつ」²⁹¹⁾とされる。

これらのほかにも II-16 で遍計所執性のあり方が詳しく分析されるほか、II-19 では遍計所執性が四種、五種に分類されること、II-20 では依他起性 (*vikalpa*) として表現されている) が十種に分類されること、II-26 において遍計所執性は非存在、依他起性は幻などのようなもの、依他起性は四種あることが述べられる。また II-27 では依他起性に八種あることが述べられるが、その二番目に「心と心に属するもの (sems dan sems las byun ba)」がきていいることには注意したい。

その際前提となっているのは、外界の対象は存在せず、ただ知識のみがあるということである²⁹²⁾。

三性の相互の関係は特に II-17, 23, 28 に的確な記述が見られ、そこではわれわれが脚注 193 で確認したような理解が示されている。

II-29, 30 では依他起性が雑染と清浄との二つに分けられること、つまり二分依他が説かれていいる。

『唯識三十頌』(*Triṃśas*)²⁹³⁾ では、第 19 偈までは三層からなるとされる知識の分析がアーラヤ識を中心になされ、そしてそれ以降の偈頌で、そうした知識にすぎないこの世界²⁹⁴⁾に三性がどのように取り込まれるのかが見られる。三性は「三種の本体 (tri-vidhah svabhāvaḥ: 23a)」とされている。

²⁷⁸⁾ *rai gi bag chags kyi sa bon las skyes pa yin pas de ka bas na rkyen gyi gzan dbai*: II-15.

²⁷⁹⁾ *skyes nas kyan skad cig las lhaq par bdag nīd gnas par mi nus pa*: II-15.

²⁸⁰⁾ *yid kyi nam par śes pa*: II-16.

²⁸¹⁾ *bag chags kyi sa bon gyi gzan gyi dbai*: II-18.

²⁸²⁾ *kun nas rion monis pa dan nam par byan ba'i no bo nīd yonis su [na] grub pa gzan gyi dbai*: II-18.

²⁸³⁾ *gnas kyi mtshan nīd*: II-32.

²⁸⁴⁾ *gzan gyi dbai gi mtshan nīd de nīd la don gyi mtshan nīd de gzan med pa nīd*: II-4.

²⁸⁵⁾ *de gzan med pa'i mtshan nīd*: II-15.

²⁸⁶⁾ *gzan du mi 'gyur ba*: II-15.

²⁸⁷⁾ *nam par dag pa'i dmigs pa*: II-15.

²⁸⁸⁾ *dge ba'i chos thams cad kyi mchog*: II-15.

²⁸⁹⁾ *rai bān gyis yonis su grub pa*: II-18.

²⁹⁰⁾ *nam par dag pa yonis su grub pa nīd*: II-18.

²⁹¹⁾ *chos nīd kyi mtshan nīd*: II-32.

²⁹²⁾ 「知識のみ」ということは以下の諸偈に見られる: II-6, 7, 8, 9, 11, 13, 14.

²⁹³⁾ 校訂サンズクリット: Lévi, S. (1925); 日本語訳: 荒牧俊像 (1976).

²⁹⁴⁾ 「この全ては表象にすぎないものである (dāṃ sarvaṃ vijāpti-mātrakaṃ: 17cd)」

通計所教性については、「捉えること」の二つ²⁹⁵⁾、「目の前のものを実体視すること（目の前に何かを立てつつある者）」²⁹⁶⁾、「特徴としては本体を欠いた」²⁹⁷⁾、「分別によって事物が構想された状態（分別によって事物が構想される）」²⁹⁸⁾、「それ（svabhāva）は存在しない」²⁹⁹⁾とされ、依他起性については、「知識」³⁰⁰⁾、「分別」³⁰¹⁾、「縁から生じる」³⁰²⁾、「独立した存在がない」³⁰³⁾、「意識と呼ばれる知識」³⁰⁴⁾、「構想作用を本質としてもつ」³⁰⁵⁾、「知識が変化すること」³⁰⁶⁾とされ、円成実性は、「表象にすぎないもの」³⁰⁷⁾、「知識にすぎないもの」³⁰⁸⁾、「最高の意味（真実）」³⁰⁹⁾、「真如」³¹⁰⁾、「本体を欠いた状態」³¹¹⁾とされる。

また *VinSg* と *SNS* に見られた三無自性性にも、三性と関連づけて簡単に触れられている³¹²⁾。五法への明確な言及は見られない。また三性と清浄・雑染の関係に対する記述もない。

『三性論偈』（*TriS*）³¹³⁾ では題名のとおり、全体を通して三性説が述べられている。まず第一偈に通計所教性、依他起性、円成実性が三性（*trayaḥ svabhāvāḥ*: 1c）として出てくる。その前提とされているのが「唯心（*citta-mātra*: 36a）」であるが、最後にはその「心」も否定されていく（*cittānupalambhatā*: 36d）。

通計所教性は、「二つの自己」³¹⁴⁾、「顕現したままの【実体視された】それ」³¹⁵⁾、「分

- 295) grāha-dvayaḥ: 26c.
 296) śūbhāyama āgrataḥ kimcīt: 27c.
 297) lakṣaṇāṁ nāva nīḥsvabhāvaḥ: 24ab.
 298) vikalpena vastu vikalpyate: 20ab.
 299) na sa vidyate: 20d.
 300) vijñānam: 26b.
 301) vikalpāḥ: 17b, 21b.
 302) pratyavābhavāḥ: 21b.
 303) na svayam-bhāvāḥ: 24c.
 304) mano-nāma vijñānam: 5cd.
 305) mananātmakam: 5d.
 306) vijñāna-parināmāḥ: 17a. ステイラマティ(*Sthiramati*) による注釈に基づいた、この語の解釈として、服部正明 (1976): 「識が瞬間ごとに表象をもつものとして生ずること」(p.4.3) および「現勢的な識と潜在意識とが、同じ瞬間において相互に因となり果となること」[「種の変化」である] (p.5.11)。その他この語に関して: 長尾雅人 (1952) 「転染の論理」, pp.237-265.
 307) vijñapti-mātrāḥ: 25d, vijñapti-mātratva: 26a.
 308) vijñāna-mātratva: 28c.
 309) paramārthāḥ: 25a.
 310) tathatā: 25b.
 311) nīḥsvabhāvatā: 24d.
 312) 「三種の本体によって三種の無自性性がある（*tri-viśvasya svabhāvasya tri-vidhām nīḥsvabhāvatām*: 23ab）」
 校訂サンスクリットおよび校訂チベット: de La Vallée Poussin, L. (1933): 日本語訳: 長尾雅人 (1976)。なお *TriS* のヴァスバンダウ(*Vasubandhu*) 作に疑問を呈する論文に以下のものがある: 普原泰典 (1996).
 314) dvayātman: 4b.
 315) yathā khyāti sa: 2b. この箇所およびその他の *TriS* に見られる動詞 *khyā* およびその派生語 *khyānam*, *khyāṇ* などに関しては、伊藤重敏 (1953) に詳しい。

別にすぎない存在」³¹⁶⁾、「顕現したもののそのまま【に実体視すること】」³¹⁷⁾、「言語表現を自己とするもの」³¹⁸⁾、「存在するものとして捉えられている」³¹⁹⁾、「絶対に存在しない」³²⁰⁾とされ、「[幻の] 象」など³²¹⁾と喻えられる。依他起性は、「非存在の分別」³²²⁾、「言語」³²³⁾、「縁にもとづいて生じる」³²⁴⁾、「顕現する主体」³²⁵⁾、「言語」³²⁶⁾、「隠った存在としては存在するが顕現したもののままには存在しない」³²⁷⁾、「心」³²⁸⁾とされ、「それ（幻の象）の形相」など³²⁹⁾と喻えられる。円成実性は、「二つのものがない、法性」³³⁰⁾、「顕現する主体が顕現したままに【実体視されたものとして】は常に存在していない状態」³³¹⁾、「異なる状態のない」³³²⁾、「言語」³³³⁾、「二つではないもの、二つのものの非存在」³³⁴⁾とされ、「そこ（幻の象の形相）に象が非存在であること」³³⁵⁾とか「[幻術で用いられる] 木片のようなもの、真如」³³⁶⁾と喻えられる。

また依他起性は、第5-8偈で詳しく分析されている。すなわち、第5偈に見られる「心（*cittam*: 5a）」は「原因あるいは結果となるもの（*hetu-phata-bhāvāḥ*: 6a）」という二つに分けられ、「原因となるもの」は「アーラヤと名づけられる知識（*ālayākhyā-vijñānam*: 6c）」として、「結果となるもの」は「転【識】と名づけられる七種【の知識】（*pravṛtty-ākhyam saptaadhā*: 6d）」として説明される。さらにこれらのうちアーラヤ識が「汚れの潜在印象の種子によって積み重ねられている（*saṃkleśa-vāsana-bījais citatvam*: 7ab）」、七識が「種々の形として生じる（*citrākāra-pravṛtti*: 7d）」と説かれる。また依他起性は「虚妄分別（*abhūta-kalpāḥ*: 8a）」として、「異熟した結果に関するもの（*vaipākīkāḥ*: 8c）」、「因相に関するもの（*naimittikāḥ*: 8cd）」、「顕現に関するもの（*prātibhāṣikāḥ*: 8d）」の三種が挙げられ、これらのうち最初のものが「根本識（*mūla-vijñānam*: 9a）」、後二者が

- 316) kalpanā-mātra-bhāvāḥ: 2d.
 317) yathākhyānam: 3a.
 318) vyavahāratma: 23a.
 319) sativena grhyate: 11a.
 320) atyantābhāvāḥ: 11b.
 321) hastin: 28a. そのほか、「[幻の] 象のようなもの、二つのもの（*hasti-vat, dvayam*: 30d)」。
 322) asaṭ-kalpāḥ: 4a.
 323) yat khyāty asaṭ: 2a.
 324) pratyavādhma-vṛtti: 2c.
 325) khyāṇ: 3a.
 326) vyavahar-ātmanā: 23b.
 327) vidyate bhrānti-bhāvena yathākhyānam na vidyate: 12ab.
 328) cittam: 5a.
 329) tad-ākṛti: 28b. そのほか、「[幻の] 象の形相のようなもの、分別（*hasty-ākāra-vat, vikalpāḥ*: 30cd)」。
 330) advaya-dharmatā: 4d.
 331) khyātur yathākhyānam sadāvidyamānatā: 3ab.
 332) ananyatāḥva: 3d.
 333) vyavahāra-samuccheda: 23c.
 334) advayaṭvam, dvayasvabhāvāḥ: 13ab.
 335) tatra hasty-abhāvāḥ: 28c.
 336) kāṣṭha-vat, tathatā: 30b.

「[七] 転識 (pravṛtti-vijñānam: 9c)」に割り当てられている。

このように依他起性に関する記述が多いこと、また三性を出す場合にまず依他起性に触れられることから考えても、*Tris* でいかに依他起性が重要視されているか、依他起性が三性の中心と考えられているかが伺えよう。この点は *MS* と共通している。そのほか上にも挙げたように、依他起性を「顕現する主体」「言語表現する主体からなるもの」として、「拠り所」ではなく「主体」とすることがあるのもこの論書の特徴と言えよう。

清浄と雑染の問題に関しては、遍計所執性と依他起性が「汚れの特徴 (saṃkleśa-lakṣaṇam: 17b)」として、円成実性が「清浄の特徴 (vyavadānasya lakṣaṇam: 17d)」として説かれている。

ここでは三性説もやはり知識の中に取り込まれたものであり、特に依他起性に関する詳細な説明からはかなり発展した形態であることが見てとれる。この三性説は少なくとも八識と関連付けられており、「名づける」「因相」「分別」「真如」といった語句からは五法が意識されているようにも思える。また遍計所執性が「二つのもの」、依他起性が「アーラヤ識」と「七転識」というようにそれぞれが二つに分けられていることにも注意したい。

『入楞伽經』(LAS)³³⁷⁾ では、第Ⅱ章を中心に三性説に関する記述が見られる³³⁸⁾。そのうち最も具体的に三性が説明してある箇所は Nanjio, B. (1923) pp.67.2-68.7 であり、そこでは本体の三つの特徴³³⁹⁾として以下のように分類されている。

遍計所執性が、「因相から生じる」³⁴⁰⁾、事物の因相や特徴への執着³⁴¹⁾とされ、後者はさらに次の2つに分類される。すなわち、(1)「名への執着、因相の特徴(名)への執着、自己内と外界の諸事物(諸法)に対して独自と共通の特徴を遍く知ること、識別すること」³⁴²⁾と(2)「名に対応する事物の因相への執着、自己内と外界の事物(法)への執着」³⁴³⁾とである。依他起性は、「事物の因相や特徴を形として」³⁴⁴⁾、「[遍計所執性がそれを] 依り所あるいは縁り所として生じているところのもの」³⁴⁵⁾とされ、円成実性は、「因相と名という事物の特徴への構想を離れた真如」³⁴⁶⁾、「聖者の知識の理解に入った、つまり内的な(自内証の) 聖者の知識の領域にあるもの」³⁴⁷⁾、さらには「如来蔵の真髓」³⁴⁸⁾とされる。

- 337) 校訂サンस्कクリット: Nanjio, B. (1923); Vaidya, P. L. (1963); 日本語訳: 安井広済 (1976)、常盤義伸 (1994)、南條文雄、泉芳瑛 (1927); 英語訳: Suzuki, D. T. (1932).
- 338) Nanjio, B. (1923), II: pp.56.14-58.1, 62.6-63.1, 67.2-68.7, 117.18-118.4, 127.14-133.1; III: pp.150.9-150.16, 163.10-164.4; VI: pp.224.4-229.9.
- 339) *svabhāva-lakṣaṇa-trayaṃ*: p.67.2-3.
- 340) *nimittāt pravartate*: p.67.4.
- 341) *vastu-nimitta-lakṣaṇābhiniवेशāḥ*: p.67.7.
- 342) *nāmābhiniवेशāḥ, nimitta-lakṣaṇābhiniवेशāḥ, adhyātmika-bāhyeṣu dharmeṣu sva-samānyalakṣaṇa-parijñānavabodhaḥ*: p.67.12-13.
- 343) *nāma-vastu-nimittābhiniवेशāḥ*: p.67.9-10, *adhyātmika-bāhye-dharmābhiniवेशāḥ*: p.67.11.
- 344) *vastu-nimittā-lakṣaṇākāra*: p.67.6.
- 345) *yad-āśrayāmbanāt pravartate tat*: p.67.14-15.
- 346) *nimitta-nama-vastu-lakṣaṇa-vikalpa-virahitā tathatā*: p.67.16-17.
- 347) *ārya-jñāna-gatī-gaṇana-pratyātmārya-jñāna-gatī-gocara*: p.67.17.
- 348) *tathāgata-garbha-hṛdayam*: p.68.1.

そして最後に II-134 において、三性と五法との関係が述べられる。ここでは因相と名と分別が遍計所執性と依他起性に、正智と真如が円成実性に振り分けられる。さらに五法の前三者は、直前の遍計所執性を説明した散文部分を参照すれば、それらのうち因相と名とが遍計所執性に相当することが分かる。

円成実性が如来蔵と関連づけられていることは特筆すべきことである。また第6章で Nanjio, B. (1923) pp.225.5-225.17, 227.8-228.4 にも三性³⁴⁹⁾に関する記述が見られる。

ここでは、遍計所執性は、「自己」と「自己に属するもの」³⁵⁰⁾、「名、因相」³⁵¹⁾とされ、依他起性は、「虚妄分別」³⁵²⁾、「自らの心に現れた[像]の分別」³⁵³⁾、「それ[遍計所執性]を依り所として生じる分別」³⁵⁴⁾、「心」と「心に属するもの」³⁵⁵⁾とされ、円成実性は、「正智、真如」³⁵⁶⁾とされる。

ここでは五法の中に三性と八識と二無我が包摂される (p.227.8-11) とされており、まさに種々の唯識学説の総合同も言うべき記述である。

先に見た部分では五法のうち分別がどこに配当されるのか明らかではなかったが、この記述によりそれは依他起性に相当することが分かる。

注意すべきは遍計所執性と依他起性において、「自己」と「自己に属するもの」、³⁵⁷⁾「心」に属するもの」というように、それぞれに「捉えるもの」と「捉えられるもの」の二つが当てられていることであり、こうした分類は *MSA* や *Tris* にも見られた。そして遍計所執性の二を離れることが二無我につながるが、依他起性は八識との関わりをもってくる³⁵⁷⁾。

また、遍計所執性を依り所に依他起が明らかになるという考え方は他の経論には見られないユニークなものであるが、こうした記述は p.150.9-16 にもある³⁵⁸⁾。

ここでは依他起性が外界の対象そのものではなく知識内に現れた形 (*ākāra*) とか分別

- 349) *trayaḥ svabhāvaḥ*: p.227.10.
- 350) *ātmānūya*: pp.225.8, 225.14, 228.1.
- 351) *nāman, nimittam*: p.227.11.
- 352) *abhūta-vikalpāḥ*: p.225.14.
- 353) *sva-citta-dṛṣṭya-vikalpa*: p.225.16.
- 354) *tad-āśraya-pravṛtito vikalpāḥ*: p.227.12-13.
- 355) *citta-caitta*: p.227.13.
- 356) *saṃvaga-jñānam, tathatā*: p.227.15-16.
- 357) Nanjio, B. (1923) pp.62.7-63.1, esp. p.62.14-16: *deha-bhoge-pratiṣṭhā-gatī-svabhāva-lakṣaṇam mahāmāte śāyā-vijñāna-grāhya-grāhaka-lakṣaṇa pravartanānam ...* (「身体と享受と依り所」が有する本体の特徴は、アーラヤ識の「捉えられるもの」「捉えるもの」の特徴として生じつつあるものであるが、...)。つまり、依他起性に当たる分別はアーラヤ識を基盤に「心」と「心に属するもの」に分かれており、そのうち「心」は残り七識に当たり、他方の「心に属するもの」としてここに「身体と享受と依り所」が挙げられていると考えられる。このような考え方は *MSA* XI-40 に対する Vasubandhu の注家にも見られる。詳しくは高崎直道 (1976) p.14.11-12 を参照のこと。またこのような分類は、同じように八識を依他起性に関連付けて置く *Tris* のものとは異なることには注意しなければならない。
- 358) Nanjio, B. (1923) p.150.14-16: *bāhya-vicitrārthopelambhābhiniवेशāḥ citta-caitta-kalāpo vikalpa-saṃśābditāḥ pravartanānaḥ pravartata ātmānūyābhiniवेशāt* / (外界の様々な対象の認識への執着、つまり「自己」と「自己に属するもの」に対する執着から、分別と名づけられる現に生じつつある「心」と「心に属するもの」の総体が生じる。)

といったものを指していることから見ても、三性説は *MSA* や *MAV* 以来見られるような、知識内に取り込まれたものとなっている。そして三性、八識、二無我が五法に包摂されていることおよび円成実性の如来蔵との関連が説かれることから、*LAS* は諸々の唯識派の学説および如来蔵思想の成立以降、早くとも *SNS* や *VinSg* より後は後に成立したものだと言えよう³⁵⁹⁾。

ただ、唯識派特有の用語が頻出するにもかかわらず、その教説の特徴としては中観派の二諦の側面を強くもっていることは看過できない。このことは今までの研究でも盛んに論じられてきている³⁶⁰⁾。

以上の個所によって *LAS* に説かれる三性説はほぼ押えられることになるが、あと一個所、三性説について比較的多くの記述が見られる部分³⁶¹⁾がある。ここではまず散文部分で通計所執性の分析がなされ、その後偈頌部分で三性の相互関係が説かれていくが、まさにその偈頌部分に *As45cd* とほぼ一致する *LAS* II-191ab が含まれている³⁶²⁾。しかしこの一連の偈頌は前後との関係が読み取りにくく、これだけでは十分に理解できるものではない。これは三性説に関する記述のある他の個所と比べてみても、あきらかに統一性がなく、他の文献からの引用の寄せ集めの編を呈している。あえてその三性説の特徴を挙げれば、二諦の観点からのもの³⁶³⁾、五法との関係³⁶⁴⁾、唯識的あるいは唯心的なもの³⁶⁵⁾の三点が挙げられよう。しかし校訂テキストの読みが不確かなこともあって多くの偈ではいくつかの読みが可能になっており、恣意的な解釈にならないように注意する必要がある。

³⁵⁹⁾ *LAS* の成立年代に関しては未だ確証をみない。少なくとも I, IX, X の 3 章は最古の漢訳である求那跋陀羅訳 (大正 no.870, 443 年訳) にないことから後代の付加だとされ、またこの漢訳には存在しない偈頌もある (例えば、II-199)。しかも X 章が「古い素材をかなり正確に伝承している」(久保田力 (1989) p.167 lower 9-10.) とも言われる。しかし II-VIII 章、上記漢訳、X 章の三者に共通する部分だけを考慮した場合にも、上に見てきた三性に対する考え方は変わらず適用される。成立年代に関する研究では *LAS* とヴァスバンダラ (Vasubandhu) の前後関係が問題とされることが多い。例えば、Schmithausen, I. (1992)、舟橋尚哉 (1971)。その他 *LAS* の成立に関する研究として: Takasaki, J. (1982); 久保田力 (1984); Lindtner, Chr. (1992)。

³⁶⁰⁾ 例えば、安井広済 (1961) p.84.2-3: *LAS* では「瑜伽行派の三性説が説かれるにかかわらず、全体として中観派的な空觀の色彩が強い。」また氏はこれに続いて *LAS* に見られる二諦説の特色を解説していく。

³⁶¹⁾ Nanjio, B. (1923) pp.127.14-133.1.

³⁶²⁾ またそれに続く *LAS* II-191cd と *As46* の記述の類似性にも注意が必要である。

LAS: nāsti vai kalpito bhāvah parātantaś ca vidyate /

As: svabhāvah prakṛtiś tattvaṃ dravyaṃ vastu sad ity api /

nāsti vai kalpito bhāvah parātantaś nu vidyate // 45

astīti kalpitā bhāve samāropas trayōdīti /

nāstīti kṛtakōchedāt ucchedaś ca prakāśitah // 46

なお *LAS* II-191 は X 章にも再出する (X-305)。またこの偈は護法 (630-561) の『大乘広百論釈』(大正 no.1571) と *Bhāviveka* (ca.490-570) の *Prajñāpāradīpa* の XXV 章で、ともに題名を挙げずに、唯識派の経証として引用されている: 久保田力 (1989) p.160 upper 6-8。興味深いことに後者において、*Bhāviveka* はその同じ偈を中観的に解釈してみせている。その部分の和訳: 安井広済 (1961) pp.327.13-328.13.

³⁶³⁾ II-187, 194, 198, 199.

³⁶⁴⁾ II-193, 196, 197, 202.

³⁶⁵⁾ II-182, 185, 202.

4. *As45* と三性説との関係——*As45* は二諦の観点から説かれたものであって、そこに三性説が体系的に説かれているとは言えず、またその著者が三性を意識していたかどうかとも明言できない。しかしそれをあえて三性説の発展の中に位置付けるとすれば、それは *SNS* や *VinSg* に見られる体系として確立した三性説の前段階にあるもの、と言える。この点から *As* の著者問題を考える時、次の二つの仮説を立てることができよう。一つは、*As* はナーガールジュナ後期の作³⁶⁶⁾である、というもの。二つ目は、*As* は *SNS* 成立以前の誰かが、ナーガールジュナに仮託して *MK* の思想を説いたものである、というものである。またさらに論を進めることが許されるとして、もし *As* に三性説の萌芽を認めることができるならば、三性説は瑜伽行派によって創設されたものではなく、ナーガールジュナ以来の二諦説から派生したものであるということになる。このことは本稿で見えてきた諸経論の記述と矛盾することはないし、特に *MAV* や *LAS* において積極的に支持されている³⁶⁷⁾。

BhBh では三性は説かれていないが、後の三性に相当する概念が説かれている。そこに *As45* のものと直接の関連性を見出すのは難しい。用語としては *As* の方が以後の三性説との結びつきが強いと考えられる。竹村氏が主張されるように³⁶⁸⁾ *BhBh* も三性説の起源と考えて差し支えないと思われるが、もう一つ別の契機として *As* も挙げられないだろうか。

SNS と *VinSg* に見られる、いまだ知識の中に取り込まれていない三性説は *As45* の捉え方に非常に近いものとも言えよう。これらの経論では、依他起性を外界の対象とし、通計所執性を言語表現された対象、円成実性を言語表現される以前の対象と捉える。本項 3 の冒頭 (p.53) でも触れたように、そもそも三性とは形容詞としての用語であり、それらは外界の対象あるいはこの現象世界の異なるあり方を示したものにすぎない。したがって、正確には、依他起性では縁起して生じた性質、通計所執性ではその縁起する外界が言語習慣によって分類化され、それぞれが何らかの実体をもつものと構想された性質、円成実性ではその縁起する外界が言語によって対象として切り出される以前の、現前しているままの性質を指していると言えよう。そしてこれは *As45* に説かれていることと矛盾しないし、さらには中観派の二諦説にも通じるものである。二諦説とこれらの経論の三性説との違いは、後者が言語表現あるいは構想作用の拠り所となる外界の対

³⁶⁶⁾ 「後期の作」と考えるのは次の二つの理由による。1) ナーガールジュナの著作のうち *parāntarā* という語は *As* にしかない。もし彼が早い時期からこの用語を使用していたら他の著作にあってもおかしくないはずであろう。2) *As* の内容は *MK* のものに一致する上、そこには *MK* のエッセンスが簡潔な文章の中に詰まっておき、ナーガールジュナの著作技術および思想表現の熟達ぶりが見える。

³⁶⁷⁾ *MAV* や *LAS* では、三性と中観思想を組み合わせた説き方に *As45* との共通性があるだけでなく、前項で指摘したように両者ともに *As45*, 46 とのテキスト上の類似がある。また、これまでの研究にも三性説と二諦説との関連を指摘するものがある。例えば、服部正明 (1970) p.167 11-13: 「しかしながら『三種の存在形態』という学説は、内容的には『中論』における究極的な真理 (*paramārtha-satya* 勝義諦) と一般的な真理 (*saṃvṛti-satya* 世俗諦) との区別に関連している」と理解することができ。」

³⁶⁸⁾ 竹村牧男 (1995) pp.54.4-57.4. ここで竹村氏は *BhBh* に三性説の萌芽が見られることを確認されている。また、三性説の源流を初期大乘経典に求める試みには次のようなものもある: 荒牧典俊 (1976)、荒牧典俊 (1976)。

象を「存在するもの」として認め、三者の区別を明確にする点にある。

そしてさらに後の経論においては、この三性説はその論理構造を保ったまま、知識の中に取込まれる。つまり唯識思想と三性説がここで初めて結びつくのである。依他起性を虚妄分別であることは、外界の対象、つまり言語表現の所依となるものが知識の中に取込まれていることを示している。そうした唯識的三性説が見られるのが *MSA*, *MAV*, *MS*, *Triṃś*, *TriS* である。これらの経論においては三性説の解釈の相違が多かれ少なかれ、それぞれに特つが、知識の中での三性という点では共通している。これら後半の経論では、明らかに *As45* のものからは離れた三性が説かれている。

ただ *IAS* だけは、その思想の特殊性から、こうした瑜伽行派の諸経論の思想的進展の中に位置付けることは難しい。そこでの三性説は唯識的な各種概念を用いながらも中観的な立場から解釈されている。*As45cd* とテキストがほぼ一致する部分に関しては、*IAS* においてその前後との関係が分かりづらいことから多くのことは言えないが、*As45* の内容は *IAS* に引き継がれ、本来の中観的な立場から三性を説くという試みがなされているとも考えられる。ここではこの経典がどの時代に成立したかを明示することはできないが、三性に対する使用語句から判断して早くとも *SNS* や *VimSg* よりは後であったと言える。

As の著者

このように、*As* には「法無我 (dharma-nairātmya)」とか「依他起 (paratantra)」という、ナーガールジュナの他の著作にはみられず、かつ後代の重要な概念を形成する用語がみられる。それらは用語的には唯識派で用いられる語に一致するものであるが、概念的にはナーガールジュナのものと考えて問題ないものである。一人の思想家の思想の深まり、また外部の思想の変化を考え合わせるとき、ナーガールジュナが晩年あたりにこうした語を用い始めることは、決して不思議なことではない。これら2語の考察を通して、特に『解深密經』と *As* との間に、いくつもの共通性が指摘できた。『解深密經』の成立年代はいまだ解明されていないけれど、少なくともナーガールジュナの晩年とは、時代的に大きく隔たっていないと考えられることから、両者に共通性があることは、ある意味で当然といえよう。*As* はこれらの用語以外では、冒頭で見たように、外的要素からも内的要素からも、真作と考えられる。こうした諸点から総合的に判断するならば、*As* はナーガールジュナ晩年の作だとするものが、現時点では最も妥当な結論であらう。

Paramārthastava

Paramārthastava (*Ps*, P no.2014) は *CS* を構成する4つの讃歌のうち最後のものである。サンスクリット、チベット訳が存在し、トウチ氏やナムドゥル氏によって校訂されている³⁶⁹⁾。サンスクリットとチベット訳はよく一致している。また酒井紫朗氏によって、チベット訳からの日本語訳が発表されている³⁷⁰⁾。韻律はシュローカ。サンスクリットは11偈からなり、チベット訳も11偈。デンカルマ目録 (no.450) およびペンタノン目録 (no.656) では10偈。*CS* のなかでは最も、形式的にも内容的にも、ブッダそのものを称えることを目的としたものである。また異訳として、*Āryabhaṭṭārakamañjuśrī-paramārthastutā* (P no.2022) がある。テキスト自体は no.2014 と同じものと考えられるが、句 (pāda) 数が一定でなかったり、少なからぬ箇所でテキストがサンスクリットと完全には一致しないなど、チベット訳としてはあまりよいものではない。これら現在に伝わるチベット2訳、およびデンカルマ、ペンタノン目録ではナーガールジュナ作とされている。

Ps を引用する文献には *SĀ* (*Ps4d*, 5a), *CG* (*Ps5ab*), *TSS* (*Ps7*), *MP* (*Ps8*), *BMP* (*Ps9cd*, 10) がある。これらのうち、ダルメーンドラ (Dharmendra) の *TSS* では、ナーガールジュナによる *Ps* として引用されている³⁷¹⁾ が、バヴィヤの *MP* では、作者名には触れず *Ps* の名を挙げて引用されている³⁷²⁾。また、密教文献の *CG*³⁷³⁾ やアティシャの *BMP*³⁷⁴⁾ では、讃歌名には触れずナーガールジュナによるものとして引用されている。内容の大半がブッダを形容し、そのすばらしさを称えるというもので、思想的なものはブッダへの形容詞の中に垣間見られる。*Ps9c* には「空 (śūnya-)」という語がみられる。一方で、*Ps8* には「法界の境地 (dharmadhātu-gati)」という語がみられることに注意したい。この語は *CS* の注釈書 *Akārīkā* では、「あらゆる事物は空である、という道の関わりはないものとされている」(35a5) と注釈されており、如来蔵思想など後代の思想と

こうした内容や韻律から、*Ps* は真作と認められる。

³⁶⁹⁾ Tucci, G. (1932) pp.322–325; Nandoi, G. (2001) pp.73–79.

³⁷⁰⁾ 酒井紫朗 (1958).

³⁷¹⁾ 'di dag rñid 'phags pa Kṛtū sgrub kyas *Don dam par bstod pa las*: P no.4534, Nul02a1; D no.3711, Tsu93a1.

³⁷²⁾ *Don dam par bstod pa las kyi*: P no.5254, Tsha357a7; D no.3854, Tsha283b2.

³⁷³⁾ *tathā ca Nāgārjunapādaḥ*: Kverne, P. (1977) p.190.34.

³⁷⁴⁾ *slop dpon 'phags pa Kṛtū sgrub kyi śāl(śc) nas kyi*: P no.5344, Kt284a5; D no.3948, Kht246b4.

Catuhstava テキスト

ここでは *CS* に含まれる 4 つの讃歌の校訂テキストを示す。4 つの讃歌それぞれのサンスクリットおよびチベットテキストを挙げ、その後 *Paramārthastava* のチベット異訳 (P no.2022) のテキスト、および単独のサンスクリット写本 (DhI-DhV) を用いて校訂した *Lokāṭṭastava* のテキストを挙げる。 *Lokāṭṭastava* と *Acintyastava* に関してはリントナー氏による校訂本 (Lindtner, Chr. (1982)) を参照しながら、また *Nirvāṇaparyastava* と *Paramārthastava* に関してはトウチ氏の校訂本 (Tucci, G. (1932)) を参照しながら、複数のサンスクリット写本 (T, W, DhI-DhV)、およびチベット訳として大蔵経 4 版 (P, D, N, C) と金写テンギェル (S) を使用して、再校訂を試みた。また、4 つの讃歌の日本語試訳を最後に付した。

Lokāṭṭastava

*PNCs*¹ Jig rten las 'das par bstod pa¹ ||²

PD rgya gar skad du³ | Lokāṭṭastava⁴ |

bod skad du⁵ | 'Jig ^Nrten las 'das par bstod pa |

'Jam sdpal ^Cgzon nur gyur pa la phyag 'tshal lo⁶ ||

Ls1 lokāṭṭa namas tubhyaṃ vivikta-jñāna-vedine |

yas tvaṃ jagad-dhīyāyā khinnah⁷ karuṇayā ciraṃ⁸ ||

D dben pa'i ye ses rig⁹ gyur pa ||

'jig rten 'das ^Pkhyod phyag 'tshal 'dud ||

gaṇ khyod 'gro la phan pa'i phyir ||

yun¹⁰ rin thugs rjes ^Nnal bar gyur ||

Ls2 skandha-mātra-vinirmukto¹¹ na sattvo 'stīti¹² te matam¹³ |

sattvārtham¹⁴ ca paraṃ khedaṃ agamas tvaṃ mahā-mune ||

phuṇi po tsaṃ las grol ^Cba yi ||

sens ^Scan med par khyod bzed la ||

sens can don la'an mchog ^Pgzol bar ||

thub pa ^Dchen po khyod nīd žugs¹⁵ ||

Ls3 te 'pi¹⁶ skandhās tvaṃ dīḥman¹⁷ dhūmadbhyaḥ saṃprakāśitāḥ |

māyā-marīci-gaṇḍharva-nagara-svapna-saṃnibhāḥ¹⁸ ||

¹ Jig rten las 'das par bstod pa P, N, C, S / om. D

² || P / || N, C / I || S / om. D

³ skad du P, D, N, C / skadu S

⁴ Lokāṭṭastava P, S / Lokāṭṭastavaṃ D / Lokāṭṭastapa N / Lokāṭṭastava C

⁵ skad du P, D, N, C / skadu S

⁶ 'tshal lo P, D, C / 'tshalo N, S

⁷ khinnah Lindtner's edition / khinna. T kār, (T ſik)

⁸ karuṇayā ciraṃ (T ſik), Lindtner's edition / +++++raṃ T kār

⁹ rig N, S / rigs P, D, C

¹⁰ yun D, N, C, S / yul P

¹¹ skandha-mātra-vinirmukto Lindtner's edition / skandha-mātra-vinīrnmuktaḥ (T ſik) / +++++[rnmukto] T kār

¹² na sattvo 'stīti Lindtner's edition / na satvo 'stīti T kār / sattvo nāstīti G, M

¹³ -am Lindtner's edition / -an T kār

¹⁴ sattvārtham Lindtner's edition / satvārthaṃ T kār / +++ (T ſik)

¹⁵ žugs D / žugs P, N, C, S

¹⁶ te pi Lindtner's edition, (T ſik) / te pi T kār

¹⁷ skandhās tvaṃ dīḥman Lindtner's edition, (T ſik) / +++++man T kār

¹⁸ -gaṇḍharva- -saṃnibhāḥ Lindtner's edition / -gaṇḍharva- -saṃnibhāḥ T kār, (T ſik)

blo ldan khyod kysis¹⁹ phuñ po²⁰ de'an ||
 sgyu ma smig tgyu dri za yi ||
 gron^N khyer rmi lam ji bzin du ||
 blo ldan rnams la rab tu Cbstan ||

N 76a3
C 78a3

Ls4 hetutah sambhavo yeṣam tad-abhāvan na santi²¹ ye |
 katham²² nāma na te spaṣṭam pratibimba-samā²³ matah ||²⁴

gañ dag rgyu s'las byuñ ba rnams ||
 P de med par ni yod min pas ||
 gzugs brñan nīd dan mtshunś pa ru ||
 gsal bar ci yi P'phyir mi 'dod ||²⁵

S 97a3
P 79b1
D 68b7

Ls5 bhūtāny acakṣur-grāhyāni²⁶ tan-mayaṃ cākṣuṣaṃ katham²⁷ |
 rūpaṃ tvaṃyāvaṃ²⁸ bruvatā²⁹ rūpa-grāho³⁰ nivāritah³¹ ||

'byuñ ba mig giś³² gzuñ³³ N min pas ||
 de³⁴ dños mig gi' ji ltar yin ||

¹⁹ kysis Lindtner's edition / kyi P, D, N, C, S

²⁰ phuñ po C / phuñ P, D, N, S

²¹ santi (T tñk) / samnti T kār

²² katham (T tñk) / kathan T kār

²³ pratibimba-samā Lindtner's edition, (T tñk) / prati+++ma T kār

²⁴ PPP p.413.5-7: yathoktam ācārya-pādāḥ

hetutah sambhavo yeṣam tad-abhāvan na santi ye |

katham nāma na te spaṣṭam pratibimba-samā matah || iti |

²⁵ Jig rten las 'das (P95a3) pa'i bstod pa las |

²⁶ BCP: (P Śa183b3, D Śa186a7) de skad du yan

²⁷ gan zīg tgyu rnams las skyes pa || de yod min phyir med pa sie ||

²⁸ gan zīg tgyu rnams las skyes pa || de med pas ni med gyur na ||

²⁹ de dag gzugs briñan dan mtshunś pa || gsal(gsal.D/bad P) ba nīd du cis mi 'dod ||

³⁰ (This corresponds with the Ls4's Skt. as well as its Tib. does.)

³¹ 'Jig rten las 'das (P95a3) pa'i bstod pa las |

³² gan zīg tgyu rnams las skyes pa || de yod min phyir med pa sie ||

³³ gan zīg tgyu rnams las skyes pa || de yod min phyir med pa sie ||

³⁴ ji bñin du ni gsal ba de(de D/do P) || gzugs briñan dan ni mtshunś par 'dod ||

³⁵ ces gzuñ so || (This doesn't correspond so exactly to the Ls4's Skt. as its Tib. The singular number of a: *ganā śig*

doesn't correspond to the plural one of a: *yeṣam* of the Ls4's Skt, and the *pūdas* cd don't have a negative particle.)

³⁶ 26-ān Lindtner's edition / -ān T kār, (T tñk)

³⁷ 27-ān Lindtner's edition / -ān T kār

³⁸ lacks the first and the third folio at least in the microfiche edition.

³⁹ 28 tvaṃyāvaṃ Lindtner's edition, (T tñk) / tvaṃyā+ T kār / -va W, of which the second folio begins with this *va*. W

⁴⁰ 29 bruvatā T kār, (T tñk) W, G / vadina M

⁴¹ 30 rūpa-grāho T kār, (T tñk) / rūpa-grāho W

⁴² 31 nivāritah T kār, (T tñk) / nīlvāritah W

⁴³ 32 mig giś D / mig gi P, C, S / mīgi N

⁴⁴ 33 gzuñ D / gzugs P, N, C, S

⁴⁵ 34 de P, D, N, S / de C

⁴⁶ 35 mig gi P, D, C, S / mīgi N

gzugs^P nīd C gzuñ bar rab bkag pa ||
 s'gzugs nīd khyod kysis de ltar gsuñś ||³⁶

P 79b2
C 78a4
S 97a4

Ls6 vedānīyaṃ vinā nāsti³⁷ vedanāto³⁸ nirātmikā³⁹ |
 tac ca vedyaṃ svabhāvena nāstīty abhinataṃ⁴⁰ tava ||

tshor bya med par de med pas ||

tshor ba nīd ni bdag med pas ||

tshor bya⁴¹ de yañ rañ bzin gyis ||

N yod^P pa min⁴² par khyod⁴³ P nīd bzed ||

N 76a5
D 69a1
P 79b3

Ls7 saṃjñārthayor ananyatve⁴⁴ mukhaṃ dāhyeta vahninā⁴⁵ |
 anyatve dhigamābhāvas⁴⁶ tvayōktaṃ bhūta-vādinā ||

min dan don dag tha dad min ||

me yis C'kha nīd 'tshig⁴⁷ par 'gyur ||

g'zan S'na'ān rtogs⁴⁸ pa med⁴⁹ 'gyur zēs ||

bden pa gsuñ ba khyod kysis bstan ||

C 78a5
S 97a5

Ls8 kartāsvatantraḥ⁵⁰ karmāpi⁵¹ tvayōktaṃ vyavahārataḥ⁵² |

³⁶ TSS: (P Nu95a3, D Tsu86b4; just after the quotation of Ls4)

'byuñ ba mig giś gzuñ bya min || de las byuñ min ji lta bu || (P95a4)

khyod kysis de ltar gzugs (D86b5) gsuñ pa || gzugs su 'dain pa bzlog par mdzad ||

ces bśad pa yin no | (This corresponds with the Ls4's Skt. as well as its Tib. does, except b: *man*, which must be

'mig'.)

³⁷ GR p.224.15-17: 'Jig rten las 'das par bstod pa las |

'byuñ rnams mig gzuñ ma yin na || de 'byuñ mig gzuñ ji ltar zēs ||

gzugs la de skad gsuñ pa na || khyod kysis gzugs kyi 'dain pa bzlog ||

ces gsuñ la | (This corresponds with the Ls4's Skt. as well as its Tib. does.)

³⁸ MA pp.199.20-200.5: (P 'A336a2, D 'A32b2) ji skad du

'byuñ rnams mig bzuñ ma yin na || de byuñ(byuñ p.200.2, P/'byuñ D) mig (D282b3) bzuñ ji ltar zēs ||

gzugs la de skad gsuñ pa na || khyod kysis (P336a3) gsuñ kyi 'dain pa bzlog ||

ces gsuñ la | (This corresponds with the Ls4's Skt. as well as its Tib. does.)

³⁹ 'nāsti T kār, (T tñk) / nāst W

⁴⁰ vedanāto T kār, (T tñk) / vedanāto W

⁴¹ nirātmikā T kār, (T tñk) / nīlātmakā W

⁴² nāstīty abhinataṃ (T tñk) / nāstīty abhinataṃ W / ++++tam T kār

⁴³ bya Lindtner's edition / ba P, D, N, C, S

⁴⁴ 42 min D / med P, N, C, S

⁴⁵ khyod P, D, N, S / khyed C

⁴⁶ ananyatve T kār, (T tñk) / ananyatve W

⁴⁷ dāhyeta vahninā Lindtner's edition / ++++hina T kār / dāhyet vahni+ (T tñk) / dāhyate vahninā W

⁴⁸ dhigamābhāvas T kār, (T tñk) / dhigamābhāva W

⁴⁹ 47'tshig P, N, C, S / tshig D

⁵⁰ 48'togs P, N, C, S / rtog D

⁵¹ 49 med D, N, C, S / miñ or mid P

⁵² kartāsvatantraḥ *ego* / kartāsvatantraḥ W, (T tñk) / karttā svatantraḥ T kār / kartā svatantraḥ Lindtner's edition

⁵³ karmāpi W / karmāpi T kār

⁵⁴ vyavahārataḥ T kār, (T tñk) / vyavahāritah W

parasparāpekṣikī tu⁵³ siddhis⁵⁴ te 'bhimatānayaoh⁵⁵ ||⁵⁶

byed po ran dban nīd las⁵⁷ *P*kyan ||
tha sñad du ni *N*kyhod kyes bstan ||
phan tshun *D*btos⁵⁸ pa can nīd du⁵⁹ ||
grub par khyod ni bzed *C*'pa lags ||

*Ls*9 na kartāsti⁶⁰ na bhoktāsti puṇyāpuṇyam pratītya-*jam*⁶¹ |
yat pratītya⁶² na taj jātaṃ proktaṃ vācas-pate⁶³ tvayā ||⁶⁴

byed po yod min spyod po'añ⁶⁵ med ||
S'beod nams de min rten 'brel skyes ||
P'brten⁶⁶ 'nas skyes gañ⁶⁷ ma skyes źes ||
tshig gī⁶⁸ bdag po khyod kyes *N*'gsuñs⁶⁹ ||

*Ls*10 ajñāyamanāṃ na jñeyam vijñānaṃ⁷⁰ tad⁷¹ vinā na ca |
tasmā⁷² svabhāvato⁷³ na sto⁷⁴ jñāna-jñēye tvam ūcivān⁷⁵ ||

śes pa med par śes bya⁷⁶ min ||
de med⁷⁷ rnam par śes pa'añ med ||⁷⁸

⁵³ parāpekṣikī tu (T ſtk) M, G / parāpekṣikī + T kār / parāprenaśikīndrā W

⁵⁴ siddhis W, (T ſtk) / cddhis T kār

⁵⁵ bhimata- T kār, (T ſtk) / bhimata- W

⁵⁶ BCP p.476.13-16: uktañ ca |

kartā svatantraḥ karmāpi tvayōktaṃ vyavahāratāḥ |

parasparāpekṣikī tu siddhis te 'bhimatānayaoh ||

⁵⁷ āid las D / las nīd P, N, C, S

⁵⁸ btos P, N, C, S / btos D

⁵⁹ āid du P, D, C, S / āidu N

⁶⁰ na kartāsti Lindtner's edition / na kartāsti T kār, (T ſtk) / va kartāsti W

⁶¹ pratītya-*jam* Lindtner's edition / pratītya-*jam* W / pratītya- T kār / pratī-*jam* (T ſtk)

⁶² pratītya T kār, (T ſtk) / pratītya W

⁶³ vācas-pate T kār, (T ſtk) / vācā-pate W

⁶⁴ BCP p.476.16-17, just after the quotation of *Ls*18:

na kartāsti na bhoktāsti puṇyāpuṇyam pratītya-*jam* |

yat pratītya na taj jātaṃ proktaṃ vācas-pate tvayā || iti |

⁶⁵ po'ai D / pa'añ P, N, C, S

⁶⁶ brten P, N, C, S / rten D

⁶⁷ gat Lindtner's edition / kyan P, D, N, C, S

⁶⁸ shig gi P, D, C, S / tshig N

⁶⁹ suñs P, N, C, S / suñ D

⁷⁰ vijñānaṃ (T ſtk) / vijñāna T kār / vñāḥ. W

⁷¹ tad (T ſtk), W / tat T kār

⁷² tasmā T kār, (T ſtk) / tasmāt W

⁷³ svabhāvato Lindtner's edition / sva+++ T kār / ++vataḥ T ſtk / svabhāvatoḥ W

⁷⁴ to T kār, (T ſtk) / ſto W

⁷⁵ tvam ūcivān W, (T ſtk), G / tvam ūcimān T kār / te śucitām M

⁷⁶ bya D / pa P, N, C, S

⁷⁷ med P, D, N, S / min C

⁷⁸ || ego / || P, D, N, C, S

DC de phyr śes dan śes bya dag ||
rañ dños med *P*'ces khyod kyes *S*'gsuñs⁷⁹ ||⁸⁰

*Ls*11 lakṣyāl lakṣaṇaṃ⁸¹ anyac cet syāt tal⁸² lakṣyam alakṣaṇaṃ⁸³ |
tayor abhāvo⁸⁴ 'nanyatve vīspāṣṭaṃ⁸⁵ kathitaṃ tvayā ||⁸⁶

mtshan nīd mtshon bya gzan nīd na⁸⁷ ||
mtshon bya mtshan nīd med par 'gyur ||⁸⁸
N'tha dad min na'an de med⁸⁹ par ||
khyod kyes gsal po nīd du bstan ||

*Ls*12 lakṣya-lakṣaṇa-nirmuktaṃ⁹⁰ vāg-udāhāra-varjitaṃ⁹¹ |
śāntaṃ jagad idaṃ dīṣṭaṃ bhavatā jñāna-cakṣuṣā⁹² ||⁹³

*C*mtshan nīd *P*'mtshon bya rnam bral zñi ||
tshig gis⁹⁴ brjod pa *D*'rnam spañs par ||
khyod kyes⁹⁵ *S*'ye śes spyān nīd kyes ||

⁷⁹ suñs P, N, C, S / suñ D

⁸⁰ MA p.163.3-8: (P 'A323b6, D 'A271b3) ji skad du |

ma śes pa ni śes bya min || de med rnam par śes med pa ||

de phyr śes dan śes bya dag || ran bñin med par khyod kyes suñs ||

śes bya ba dan | (This corresponds well with the *Ls*10's Skt, except that a: *ma śes pa* doesn't have explicitly the sense of passive like the Skt, a: *ajñāyamanāṃ*, neither does a: *śes pa med por* of the *Ls*10's Tib.)

Gr p.173.15-17: 'Jig rten las 'das par bñod pa las kyan |

ma śes par ni śes bya min || de med rnam par śes med pa ||

de phyr śes dan śes bya dag || ran bñin med par khyod kyes suñs ||

śes pa dan | (This corresponds well with the *Ls*10's Skt, except that a: *ma śes par* doesn't have explicitly the sense of passive like the Skt, a: *ajñāyamanāṃ*, neither does a: *śes pa med por* of the *Ls*10's Tib.)

⁸¹ lakṣyāl lakṣaṇaṃ T kār / lakṣāl lakṣaṇaṃ (T ſtk) / lakṣyalakṣaṇaṃ W

⁸² anyac cet syāt tal Lindtner's edition / anyac cet syāt tal (T ſtk) / +++++ tal T kār / aya pro smākal W

⁸³ lakṣyam alakṣaṇaṃ Lindtner's edition / lakṣyam alakṣaṇaṃ T kār / lakṣam alakṣaṇaṃ (T ſtk) / lakṣana-lakṣaṇaṃ W

⁸⁴ tayor abhāvo T kār, (T ſtk), M / tayor abhāve G / tayo bhāvo W

⁸⁵ 'nanyatve vīspāṣṭaṃ T kār / māñtve vīspāṣṭaṃ W / 'nanyatve spāṣṭaṃ (T ſtk)

⁸⁶ P/P p.64.5-7: yathā cōktaṃ |

lakṣyāl lakṣaṇaṃ anyac cet syāt tal lakṣyam alakṣaṇaṃ |

tayor abhāvo 'nanyatve vīspāṣṭaṃ (sic) kathitaṃ tvayā || iti |

⁸⁷ na D / ni P, N, C, S

⁸⁸ || P, D, C, S / || N

⁸⁹ de med P, N, C, S / med de D

⁹⁰ lakṣya- T kār, W / lakṣa- (T ſtk)

⁹¹ -am Lindtner's edition / -an T kār, W

⁹² jñāna-cakṣuṣā T kār, (T ſtk) / jñāna-cakṣu[ṣā] W

⁹³ 4.4 (ab) p.55.19-22: svabhāve-lakṣaṇenāti

lakṣya-lakṣaṇa-nirmuktaṃ vāg-udāhāra-varjitaṃ

tat tvayā prajñaptikī yuktā lakṣya-lakṣaṇa-sam sthitiḥ ||

iti bhāvāḥ ...

⁹⁴ S (ab) p.28.16: lakṣya-lakṣaṇa-nirmuktaṃ vāg-udāhāra-varjitaṃ |

⁹⁵ tshig gis P, D, C, S / tshigis N

⁹⁶ kyes P, N, C, S / kyi D

D 69a3
C 78a7
P 79b6
S 97b1

N 76b1

C 78b1
P 79b7
D 69a4
S 97b2

P 79b4
N 76a6
D 69a2
C 78a6

S 97a6
P 79b5
N 76a7

'gro ba 'di dag 'zi bar mdzad ||

Ls13 na saṃ utpadyate bhāvo nāpy asaṃ⁹⁶ sad-asaṃ na ca |
na svato nāpi parato na dvābhyāṃ jāyate katham⁹⁷ ||⁹⁸

dños po yod pa ṇid mi skye ||
med pa'aṅ^N ma yin yod^P med min ||
bdag las ma yin^G gzan las min ||
gñis min skye ba⁹⁹ ji lta bu ||

Ls14 na sataḥ¹⁰⁰ sthiti-yuktasya vināśa upapadyate¹⁰¹ |
nāsato 'śva-viśāṇena¹⁰² samasya śamatā¹⁰³ katham¹⁰⁴ ||

yod pa gnas par rigs 'gyur gyi ||
'jig par^S 'gyur^D ba ma yin no¹⁰⁵ ||
med pa mi gnas par rigs¹⁰⁶ pas ||
P'jig par 'gyur ba ma yin no¹⁰⁷ ||

Ls15 bhāvān nārthāntaram nāśo¹⁰⁸ nāpy anarthāntaram matam¹⁰⁹ |
arthāntarē¹¹⁰ bhaven¹¹¹ nityo¹¹² nāpy anarthāntare bhavet ||

Ls16 ekatve na hi bhāvasya vināśa upapadyate |
pṛthaktve na hi bhāvasya vināśa upapadyate ||

⁹⁶ nāpy asaṃ T kār, (T ſik) / napy asot W

⁹⁷ -am Lindtner's edition / -am T kār, W

⁹⁸ BCP p.387.6-8: tad uktam |

na saṃ utpadyate bhāvo nāpy asaṃ sad-asaṃ na ca |

na svato nāpi parato na dvābhyāṃ jāyate katham || iti |

⁹⁹ skye ba P, D, S / skyes pa N / skyes ba C

¹⁰⁰ -ataḥ Lindtner's edition, (T ſik) / sata T kār, W

¹⁰¹ upapadyate T kār, (T ſik) / upapadya[te] W

¹⁰² nāsato 'śva-viśāṇena T kār, (T ſik), G / nāsataś ca viśāṇena M / -[śa]to '[śva]viśāṇena W

¹⁰³ śamatā T kār, (T ſik) / samataś C, M / samata W

¹⁰⁴ katham Lindtner's edition, (T ſik) / katham T kār / kathaḥ W

¹⁰⁵ yin no P, D, N, C / yno S

¹⁰⁶ rigs D / rig P, N, C, S

¹⁰⁷ yin no P, D, C / yno N, S

¹⁰⁸ bhāvān nārthāntaram nāśo Lindtner's edition, (T ſik) / bhāvān nārthāntaram nāśo T kār / bhāva nārthāntaram

¹⁰⁹ anarthāntaram matam Lindtner's edition, (T ſik) / anarthāntaram matam T kār / ana[r]thāntara mate W

¹¹⁰ arthāntare T kār / arthantare W / anar[th]antare? (T ſik)

¹¹¹ -bha is the last *ośara* of the folio 2b of W. The third folio is missing at least in the microfiche edition.

¹¹² nityo T kār, (T ſik), G / nityam M

Ls17 vinaśāt kāraṇāt tāvat kāryōtpattir na¹¹³ yuyate |
na cāvinaśāt svapṇena¹¹⁴ tulyōtpattir matā tava ||

re^N 'zig 'zig pa'i rgyu las kyan ||
C'bras bu 'byun bar mi rigs la ||
ma 'zig las min rmi lam dan ||
'dra ba'i skye ba khyod ṇid bzed ||

Ls18 na niruddhān nāniruddhād bñād ankura-sambhavaḥ¹¹⁵ |
māyōtpāda-vad¹¹⁶ utpādaḥ sarva eva tvayōcyate ||¹¹⁷

'zig dai^P ma 'zig pa dag^S gis ||
rgyu las 'bras bu 'byun ba dag ||¹¹⁸
sgyu ma 'byun ba bzin du^D 'byun ||
kun kyan^N de bzin khyod¹¹⁹ kyes^G gsuns¹²⁰ ||¹²¹

Ls19 atas tvayā¹²² jagad idam parikalpa-samudbhavam¹²³ |
parijñātam asad-bhūtam anutpannam na naśyati¹²⁴ ||¹²⁵

de phyir khyod kyes 'gro 'di dag ||¹²⁶

¹¹³ na Lindtner's edition, (T ſik) / naa T kār

¹¹⁴ svapṇena T kār, (T ſik), M / svapṇe'pi G

¹¹⁵ ankura- Lindtner's edition / ankura- T kār / ankura- (T ſik)

¹¹⁶ māyōtpāda-vad Lindtner's edition / māyōtpā[da]-vad T kār / svapnōtpāda-vad (T ſik)

¹¹⁷ BCP p.533.9-10: Caustave[śe] 'py uktam |

niruddhād vāniruddhād vā bñād ankura-sambhavaḥ |

māyōtpāda-vad utpādaḥ sarva eva tvayōcyate ||

¹¹⁸ || ego / P, D, N, C, S

¹¹⁹ khyod P, D, N, S / khyed C

¹²⁰ gsuns D / beruns P, N, C, S

¹²¹ MA p.97.8-13: (P 'A301a1, D 'A251b2) ji skad du |

sa (P301a2) bon (D251b3) 'zig dan ma 'zig las || myu gu 'byun ba ma yin pas(pas p.97.110, P/pa D) ||

khyod kyes skye ba thams cad ni || sgyu ma 'byun ba bzin du gsuns ||

śas bśad do ||

(This corresponds well with the Ls18's Skt, while its Tīb. doesn't.)

GSŦ: (P Ya64a1, D Ya69a7) de ṇid kyi phyir

sa bon 'gags dan ma (P64a2) 'gags las || myu gu 'byun ba ma yin te ||

khyod kyes skye ba thams cad n || sgyu ma'i[ma'i] P/ma D) skye ba bzin du gsuns ||

śas (D59b1) bya ba daā | (This corresponds with the Ls18's Skt. as well as the quotation of MA does, while its Tīb. doesn't.)

BCP: (P La291a3-4, D La257b7) missing is the text which should correspond to the Skt.

122 atas tvayā Lindtner's edition, (T ſik) / atas tvayā T kār

123 -am Lindtner's edition / -am T kār

124 na naśyati T kār, (T ſik), G / anaśvaram M

125 BCP p.533.11-12, just after the quotation of Ls18:

atas tvayā jagad idam parikalpa-samudbhavam |

parijñātam asad-bhūtam anutpannam na naśyati ||

¹²⁶ || ego / P, D, N, C, S

yois su¹²⁷ brtags pa las byuñ bar ||
P kun tu šes bya 'byuñ ba na'añ ||
 skye ba med ciñ 'gag med *S* gsuñs ||

*Ls*20 nityasya samstir nāstī¹²⁸ nārvānityasya samstīṭh |
 svapna-vat samstīṭh proktā tvayā tattva-vidāṃ¹²⁹ vara ||¹³⁰

rtag la 'khor ba yod ma yin ||
 mi rtag pa la'añ 'khor ba med ||
N de nīd rig¹³¹ pa'i mchog khyod¹³² kyiś ||
C 'khor *P* ba rmi lam 'dra bar *P* gsuñs ||

*Ls*21 svayam kṛtaṃ para-kṛtaṃ dvābhyāṃ kṛtaṃ ahetukam¹³³ |
 tāṅkikair¹³⁴ isyate duḥkhaṃ tvayā tūktam praṭītya-jaṃ¹³⁵ ||¹³⁶

sdug bsnal ran̄ giś byas pa dañ ||
 gžan gyis byas dañ gñis kas byas ||
 rgyu med par *S* ni rtag ge¹³⁷ 'dod ||
 khyod kyiś¹³⁸ rten¹³⁹ nas 'byuñ bar gsuñs ||¹⁴⁰

*Ls*22 yaḥ praṭītya-samutpādaḥ śūnyatā sāṃva¹⁴¹ te matā |

¹²⁷ yois su P, D, C / yoisun N, S
¹²⁸ nāstī Lindtner's edition, (T fīk) / unāstī T kār
¹²⁹ tattva-vidāṃ Lindtner's edition / taṭva-vidām T kār, (T fīk)
¹³⁰ *BCP* p.533.13-14, just after the quotation of *Ls*19:
 nityasya samstir nāstī nārvānityasya samstīṭh |
 svapna-vat samstīṭh proktā tvayā tattva-vidāṃ vara || iti ||
¹³¹ rig N, S / rig P, D, C
¹³² khyod P, D, N, S / khyed C
¹³³ am Lindtner's edition / -am T kār
¹³⁴ tāṅkikair Lindtner's edition, (T fīk) / [tāṅ]kikair T kār
¹³⁵ am Lindtner's edition / -am T kār
¹³⁶ *PP* p.55.2-4: ata evoktam
 svayam kṛtaṃ para-kṛtaṃ dvābhyāṃ kṛtaṃ ahetukam |
 tāṅkikair isyate duḥkhaṃ tvayā tūktam praṭītye-jaṃ || iti |
PP p.234.7-9: yathoktam |
 (the same as above) ||
¹³⁷ rtag ge P, D, C, S / rtag N
¹³⁸ kyiś D / kyī P, N, C, S
¹³⁹ rten P, D, N, C, S / bren Lindtner's edition
¹⁴⁰ *LR* p.68.20-22: 'Jig rten las 'das par betod pa las kyañ |
 sdug bsñal ran̄ giś byas pa dañ || gžan gyis byas dañ gñis kas byas ||
 rgyu med par ni rtag ge 'dod || khyod kyiś bren nas 'byuñ bar gsuñs ||
 (This corresponds with the *Ls*21's Skt. as well as its Tib. does.)
¹⁴¹ sāva Lindtner's edition, (T fīk) / [sā]va T kār

bhāvaḥ svatanthro nāstīti sinha-nādas tavātulaḥ¹⁴² ||¹⁴³

rten ciñ 'brel par *N* gañ 'byuñ ba¹⁴⁴ ||
P de nīd khyod ni ston par *C* bzad ||
 dnos po ran̄ dbaṅ yod *P* min žes ||
 mñam med khyod kyi seṅ ge'i sgra¹⁴⁵ ||¹⁴⁶

*Ls*23 sarva-saṃkalpa-nāśāya śūnyatāmṛta-deśanā |
 yasya¹⁴⁷ tasyām api grāhas tvayāśāv¹⁴⁸ avasāditāḥ¹⁴⁹ ||¹⁵⁰

kun rtog thams cad span̄ ba'i¹⁵¹ phyir ||
 ston̄ nīd *S* bdud rtsi ston mdzad na ||
 gañ žig de la žen *P* gyur pa ||
 de nīd khyod kyiś šin *N* tu smad ||¹⁵²

¹⁴² tavātulaḥ Lindtner's edition, (T fīk), M, G / tavātula T kār
¹⁴³ *Ls*22ab is exactly the same as *As*40ab. It is the very core of Nāgārjuna's thought.
BCP p.417.6-8: uktam ca |
 yaḥ praṭītya-samutpādaḥ śūnyatā sāṃva te matā |
 bhāvaḥ svatanthro nāstīti sinha-nādas tavātulaḥ || iti ||
AA (ab) pp.173.12, 297.19, 414.12, 557.19, 698.5, 724.13, 918.17:
 yaḥ praṭītya-samutpādaḥ śūnyatā sāṃva te matā |
SA (ab) p.491.13-15: katham tarhi
 yaḥ praṭītya-samutpādaḥ śūnyatā sāṃva te matā |
 ity-ādīkaṃ saṃgamyate |
¹⁴⁴ 'byuñ ba D / byuñ ba P, N, C, S
¹⁴⁵ sgra P, N, C, S / sgras D
¹⁴⁶ *LR* p.70.2-3:
 rten ciñ 'brel bar gañ 'byuñ ba || de nīd khyod ni ston par bzed ||
 dnos po ran̄ dbaṅ yod min žes || mñam med khyod kyi seṅ ge'i sgra ||
 žes rten 'brel gyī gñan tshigs kyiś gcig dañ tha dad dau rtag chad kyi mtha' dan skye ba'i mtha' bžir 'dzin pa 'gog par
 gsuñs so || (This corresponds with the *Ls*22's Skt. as well as its Tib. does.)
PS p.120.28-29: des na slob dpön gyī žal sia nas kyiś kyañ |
 rten ciñ 'brel par 'byuñ ba gañ || de nīd khyod ni ston par bzed ||
 dnos po ran̄ dbaṅ can med ces || mñam med khyod kyi seṅ ge'i sgra ||
 žes gsuñs so | (This corresponds with the *Ls*22's Skt. as well as its Tib. does.)
¹⁴⁷ yasya T kār, (T fīk), M / tasya G
¹⁴⁸ tvayāśāv Lindtner's edition, *BCP* (pp.399.9, 415.4) / tvayāśv T kār, (T fīk) / The folio is missing: W
¹⁴⁹ avasāditāḥ Lindtner's edition, (T fīk) / aṃvāsāditāḥ T kār
¹⁵⁰ *BCP* p.399.7-9: uktam ca |
 sarva-saṃkalpa-hānyā śūnyatāmṛta-deśanā |
 yasya(yasya Vaidya, Śāstri/ yas ca La Vallée Poussin) tasyām api grāhas tvayāśāv avasāditāḥ || iti |
BCP p.415.2-4: etad evāha |
 sarva-saṃkalpa-hānyā śūnyatāmṛta-deśanā |
 yasya(yasya Vaidya, Śāstri/ yas ca La Vallée Poussin) tasyām api grāhas tvayāśāv avasāditāḥ || iti |
¹⁵¹ span̄ ba'i ego / span̄ pa'i D / spanis pa'i P, N, C, S
¹⁵² *LR* p.146.14-18: 'Jig rten las 'das par betod pa las |

kun rtog thams cad bsal ba'i phyir || ston̄ nīd bdud rtsi ston mdzad na ||
 gañ žig de la žen gyur pa || de nīd khyod kyiś šin tu smad ||
 ces gsuñs pa ltar ro || (This corresponds with the *Ls*23's Skt. as well as its Tib. does. *bsal* ba of the *pāda* a is better
 translation than *span̄* ba of the *Ls*23's Tib.)
LN p.22.8-11: 'Jig rten las 'das par betod pa las kyañ |
 kun rtog thams cad span̄ ba'i phyir || ston̄ nīd bdud rtsi ston mdzad na ||

Ls24 nirñāḥ vaśīkāḥ śūnyā¹⁵³ māyā-vat pratrayōdbhavāḥ |
sarva-dharmās¹⁵⁴ tvayā nātha niḥsvabhāvāḥ prakāśitāḥ ||¹⁵⁵

bems *ś* po gžan dbaṅ ston pa ṅid ||
sgyu ma bāin du rkyen 'byun bar ||
ngon po khyod k'yes chos kun gyi ||
P dños med goms par mdzad pa lags ||¹⁵⁶

C 78b7

D 69b2

Ls25 na tvayōpāditaṃ kiṃcin¹⁵⁷ na ca kiṃcin¹⁵⁸ nirodhitaṃ¹⁵⁹ |

gaṇ ṅig de la ṅen gyur pa || de ṅid khyod k'yes śin tu smad ||
ces śin tu smad pa'i gñus so gñus so || (This also corresponds with the *Ls23*'s Skt. as well as its Tib. does.)

GR p.324.5-8: de kar yin par yan 'jig rten las 'das par bśod pa las |

kun rtoḡ thams cad spaṅ/spaṅ pa'i phyir || ston ṅid bdud rśi ston mdzad na ||

gaṇ ṅig de la ṅen gyur pa || de ṅid khyod k'yes śin tu smad ||

ces gñal bar gñus so || (This corresponds with the *Ls23*'s Skt. as well as its Tib. does.)

HG: (289.4) boṭod tshogs las kyan. |

kun rtoḡ thams cad gñom pa'i phyir || ston ṅid bdud rśi ston par mdzad ||

gaṇ la de la 'an 'dāin yod pa || de ni khyod k'yes smad par mdzad ||

ces dan tśon (289.5) pa ṅid ston pa ṅid gñus pa'an don 'di ṅid do || (This corresponds with the *Ls23*'s Skt. as well as its Tib. does.)

755: (P Nt98b5, D Tsu90a2) 'phags pa Kin sgrub k'yi ṅal (P98b6) sna nas k'yes

'Jig rten las 'das pa'i bśod pa las |

kun (D90a3) rtoḡ thams cad spaṅ pa'i phyir || ston ṅid bdud rśi betan pa ni ||

gaṇ yin de yi 'dāin pa yan || khyod(khyod *ego*/khyed P, D) k'yes med par mdzad pa yi ||

(The *pāda* d doesn't correspond to the *Ls23*'s Skt. with which its Tib. does well.)

MA p.310.11-16: (P 'A374a4, D 'A315b4) ji skad du |

kun rtoḡ(rtoḡ D/rtoḡs p.310.12, P) thams cad gñom pa'i (P374a5) phyir || ston ṅid bdud rśi betan par(par D/pa

p.310.13, P) mdzad ||

gaṇ la de la 'an 'dāin yod pa || de ni khyod k'yes smad par mdzad ||

ces gñus so || (This corresponds with the *Ls23*'s Skt. as well as its Tib. does.)

BCP (Skt.ed.: p.369): (P La213a7, D 191a6) ji skad du yan |

kun rtoḡ thams cad spaṅ/spaṅ D/spoṅ P) ba'i phyir || ston ṅid bdud rśi ston mdzad la ||

gaṇ ṅig de la ṅen gyur na || de ṅid khyod(khyod D/khyed P) k'yes śin tu smad ||

ces gñus pa yin no || (This corresponds with the *Ls23*'s Skt. rather than the Skt. of the *BCP*'s quotation.)

BCP (Skt.ed.: p.415): (P La238a4, D La212a5) 'di ṅid gñus pa |

nam rtoḡ thams cad spaṅ ba'i phyir || ston ṅid bdud rśi betan pa yin ||(D 212a6)

gaṇ ṅig de ru(ru P/m? D) 'dāin pa yaṅ || di ni khyed(P,D) k'yes spaṅ pa lags ||

śas(śas D/śes P) so || (This corresponds well with the *Ls23*'s Skt. rather than the Skt. of the *BCP*'s quotation. The

pāda d: *gnus pa lags* is *śin tu smad* in the *Ls23*'s Tib.)

153 śūnyā Lindtner's edition / śūnyāḥ T kār. (T tñk)

154 -dharmās Lindtner's edition / -dharmaṃs T kār. (T tñk)

155 *BCP* p.489.16-18: tad uktān |

nirñā vaśīkāḥ śūnyā māyā-vat pratrayōdbhavāḥ |

sarva-dharmās tvevā nātha niḥsvabhāvāḥ prakāśitāḥ || itī |

156 *755*: (P Nt98b6, D Tsu90a3; just after the quotation of *Ls23*)

'dod pa mnd (P98b7) dbaṅ dān lkan ston || sgyu ma bāin du rkyen byun bar ||

ngon po khyod k'yes chos kun ni || dños po med par ston par mdzad || (D90a4)

ces bśad pa yin no | (This corresponds well with the *Ls24*'s Skt, while its Tib. doesn't at the *pāda* d.)

157 kiṃcin Lindtner's edition / kiṃcin T kār. (T tñk)

158 kiṃcin Lindtner's edition / kiṃcin T kār. (T tñk)

159 -am Lindtner's edition / -am T kār

GR: (P Ca37b7) 'Jig rten las 'das par bśod pa las |

yathā pūrvam¹⁶⁰ tathā paścāt tatathāṃ buddhavān asi¹⁶¹ ||

*P*⁵¹khyod k'yes cui ṅig ma bskyed ciñ ||

'ga' yañ bkag pa ma mchis la ||

NC snon¹⁶² gyi ji ltar phyis de bzin ||

de bzin ṅid ni thugs su¹⁶³ chud ||

P 80a7
S 98a2N 77a1
C 79a1

Ls26 āryair¹⁶⁴ nisevitām enām¹⁶⁵ anāgamyā hi bhāvanām¹⁶⁶ |

nānimittaṃ hi¹⁶⁷ vijñānaṃ bhavatiḥa kathaṃ¹⁶⁸ cana ||

'phags pa mams k'yes¹⁶⁹ brten¹⁷⁰ pa yi ||

bsgom¹⁷¹ ma *P* ṅugs par mtshan med 'di ||

nam par śes par *P*, gar 'gyur ram ||

+ + + + + ||¹⁷²

P 80a8
D 69b3

Ls27 animittaṃ¹⁷³ anāgamyā mokṣo nāsti tvam uktavān |

atas tvayā mahā-yāne tat sākalyena deśitaṃ¹⁷⁴ ||

s mtshan ma med la ma *ś*ugs par ||

*N*thar pa med ces gñus pa'i phyir ||

de phyir khyod k'yes theg chen la¹⁷⁵ ||

ma lus par ni *P* de ṅid bstan ||¹⁷⁶

S 98a3
C 79a2
N 77a2

P 80b1

¹⁶⁰ pūrvam Lindtner's edition, (T tñk) / pūrvan T kār

¹⁶¹ The fourth folio of W begins with this st.

¹⁶² ston P, D, N, S / snan C

¹⁶³ thugs su P, D, C / thugs N, S

¹⁶⁴ āryair Lindtner's edition, (T tñk) / āryain T kār / āryau W

¹⁶⁵ nisevitām enām T kār, (T tñk) / nisevitām enām Lindtner's edition / nisev[itaṃ] ivalm W

¹⁶⁶ ān Lindtner's edition / ān T kār, W

¹⁶⁷ ānimittaṃ hi T kār, (T tñk), M, G / nimittaṃ na W

¹⁶⁸ am W / -an T kār, (T tñk)

¹⁶⁹ k'yes D / k'yi P, N, C, S

¹⁷⁰ brten P, N, C, S / betan D

¹⁷¹ bsgom D / bsgons P, N, C, S

¹⁷² *śSV* (p.222.3-7): de skad du yañ |

'phags pas brten pa 'di lta bu || dños po rtoḡs pa ma yin ṅin ||

rgyu mtshan med pa rnam śes ni || nam yañ 'byun bar mi 'gyur ro ||

(The meaning of this translation is not clear especially at the *pāda* b. The *pāda* b: *dños po* seems to be a translation

not of *bhāvanāṃ*, but of 'bhāvauāṃ', which is against the rule of meter.)

¹⁷³ animittaṃ T kār. / animitta W

¹⁷⁴ am Lindtner's edition / -am T kār, W

¹⁷⁵ ān Lindtner's edition / nams P, D, N, C, S

¹⁷⁶ *MA* p.23.11-15: (P 'A273b8, D 'A228a2) ji skad du sloh dpon gyi āl śia nas k'yi | (D228a3)

mtshan ma med pa ma rtoḡs par || khyod k'yes thar pa(pa D/ba P) med (P274a1) par gñus ||

de phyir khyod k'yes theg chen las || de ni tshan bar(bar P/par D) bstan pa lags ||

śas gñus so | (This corresponds with the *Ls27*'s Skt. as well as its Tib. does.)

GR: (P Ca37b7) 'Jig rten las 'das par bśod pa las |

Ls28 yad avāptaṃ¹⁷⁷ mayā punyaṃ¹⁷⁸ stutvā tvām stuti-bhājanam¹⁷⁹ |

nimitta-bandhanāpetam¹⁸⁰ bhūyāt¹⁸¹ tenākhiḷam¹⁸² jagat ||

bstod pa'i snod khyod bstod pa las ||

bdag gis¹⁸³ bsod nams gañ thob pa ||

des ni 'gro ba ma lus Cnams ||

mtshan Dsma'i 'chiñ las grol Ngyur cig ||¹⁸⁴

iti¹⁸⁵ Lokāṭīstastavaḥ¹⁸⁶ samāptah ||

'Jig rten las 'das par¹⁸⁷ Pbstod pa¹⁸⁸

slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyes mdzad pa rdzogs so¹⁸⁹ || ||

rgya gar gyi mkhan po Kṛṣṇapāṇḍita¹⁹⁰ dan¹⁹¹

lo tsā ba Tshul khrims¹⁹² rgyal bas bsgyur ciñ Czus te gtan Sja phab pa'o || ||

C 79a3
D 69b4
S 98a4
N 77a3

P 80b2

C 79a4
S 98a5

Niraupamyastava

PNCSSdPe¹ med par bstod pa² ||³

DNrgya gar skad du | Niraupa-Smyastava⁴ |

bod skad du | dPe med Ppar bstod pa |

'Jam dpal gzon nur gyur pa la phyag 'tshal lo⁵ ||

Ns1 niraupamya⁶ namas tubhyam niḥsvabhāvartha-vedine⁷ |
yas⁹ tvam dṛṣṭi-vipannasya¹⁰ lokasyāsa¹¹ hitōdyataḥ¹² ||¹³

Dgai žig lta bas phonis Cpa yi ||

'jig rten 'di la phanan brtson khyod ||

dños po med pa'i don rig pas ||

PNdpe med khyod la phyag 'tshal bstod ||

D 67b4
C 76b5

P 78a2
N 74b5

Ns2 na ca nāma tvaṃ¹⁴ kiñcid¹⁵ dṛṣṭam bauddhena caksuṣā¹⁶ |
anutarā ca te nātha dṛṣṭis¹⁷ tattvārtha-darśinī¹⁸ ||¹⁹

gaiñ žig S'khyod kyi²⁰ cuiñ žig kyañ ||

sañs rgyas spyan gyis ma gziags pa ||

S 95b3

¹ dpe P, D, C, S / dpa N
² dpe med par bstod pa P, N, C, S / om. D
³ || C / | P, N / | || C / om. D
⁴ niraupamyastava ego / nirupamastava P, N, C / nirupamastavam D / nirupamasta S
⁵ 'tshal lo P, D, C / 'tshalo N, S
⁶ niraupamya T kār, (T ſik) / niraupamā W
⁷ -bhāvartha-vedine (T ſik) / -bhāvartha-vāḥ | dñre T kār / -bhāvartha-vāḍine W / -bhāva-vedine Tucci's edition / -bhāva-vāḍine Tucci's Ms
⁸ | T kār / om. W
⁹ yas T kār, (T ſik) / yat W
¹⁰ -sya T kār, T ſik / -sya W
¹¹ lokasyāsa T kār, (T ſik) / lokasyah W
¹² hitōdyataḥ T kār, (T ſik) / hitadyataḥ W
¹³ CSS p.238.15: niraupamyo [bhagavāms ...], p.238.22-23: niḥsvabhāvartha-vedi [...], p.239.20-21: yas tvam dṛṣṭi-vipannasya lokasyāsa hiōdyata [ity ...]
¹⁴ nāma tvaṃs T kār, (T ſik) / nāsa tvaṃs Tucci's Ms / nāma tvaṃam W
¹⁵ kiñcid Tucci's edition / kiñcid T kār, (T ſik) / kiñci W
¹⁶ caksuṣā T kār, (T ſik) / caksusa W
¹⁷ dṛṣṭis Tucci's edition, (T ſik) / dṛṣṭi T kār, W
¹⁸ tattvārtha-darśinī T kār / tatvārtha-darśinī W, (T ſik) / tattva-darśinī Tucci's edition
¹⁹ CSS p.240.6-7: bauddham cakṣur [dhyānābhīṣaṃskāra-...], p.240.10: caksuṣā tvaṃs na kiñcid dṛṣṭam [sambhāvyate ...], p.240.15: anuttarā cēṭi ...
²⁰ krys D / kyī P, N, C, S